
性別人間と幽霊人間

風金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性別人間と幽霊人間

【Nコード】

N9628Z

【作者名】

嵐金

【あらすじ】

高校2年生へ進級を果たした安藤未来。
春になり、部活動の勧誘がスタートする中、未来は、勧誘先で従兄弟に再会する

プロローグ

吸血鬼、吸血天使、天界少年、魔界少年、人間天使……ここ数ヶ月で、色んな者に遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学んできた。

暁文のおかげで、自分に自信を持つことが出来た。

グレイのおかげで、自分の良さに気付く事が出来た。

瀬夏のおかげで、子供嫌いが治り、今は小さい子が可愛いと思えるようになった。

カラスのおかげで、素敵な彼氏を見つけることが出来た。

紅丞さんのおかげで、心から人を好きになることが出来た。

これからも、何かに遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学ぶだろう。……そんな気がする。

……って、いきなりエピソードのような感じになってしまったが、これはあくまでプロローグ。

今回は、幽霊体質になった人間と、久しぶりに再会した従兄弟の話。

噂話

4月。私は高2に進級し、紅丞さんは人間に戻り、無事に学校への復帰を果たした、月の後半。

「未来くん！！大ニュース大ニュース！！」

朝。綾子が、人がまばらに集まった教室で、大声で、しかもあろう事か”くん”付けで話しかけてきた。

「綾子……あんたねえ、いい加減にしないと私もそろそろ怒」

「あーあー！説教なら後で聞くから！！それよりも大ニュースだよ！！」

「まったく……何？」

「1年生に、スッゴクカッコいい眼鏡の男子がいるんだって！！もしかしたら、佐川先輩以上かもよ！？」

「カッコいい男子がいるなんて、正直な所、興味ゼロなのだが、」佐川先輩以上かも」と言う言葉に、少し力チンと来た。

「……紅丞先輩以上？」

「そう！！噂によると、近寄った女子はみんなその男子に惚れちゃうほどカッコいいらしいの！！……もしかしたら、未来も惚れちゃうかもよ！？」

綾子は何故か、ほかの誰よりも早く、私と紅丞さんが付き合ってる事と、同棲していることを探り当てた。私も紅丞さんも隠してたのに……もしかしたら、探偵にでもなれるのかもしれない。

「……あのねえ、私は顔で紅丞先輩を選んだわけじゃないの。たとえば、その男子が紅丞先輩よりもかつこよくても、惚れるわけないでしょ。」

私は、紅丞さんの事は、家では”紅丞さん”だが、学校では”紅丞先輩”と呼んでいる。

「ヒューッ！ラブラブですねぇ安藤未来さん！」

「はいはい……。」

「……でさつ、私ね、今日はその男子に、会いに行こうと思うんだ。だからさ、未来も一緒に行かない？」

「わ、私も？……なんで？」

「本当に惚れちゃわないかどうか、確かめたいのさ！……ついでに、演劇部の勧誘とかしちやえば？」

確かに、去年から、演劇部には女子の入部希望者が耐えない。……紅丞さんがいるのが原因なのは目に見えているが。

「でも、確かにこれじゃあ、演劇部がキャバクラになりかねないからな……うん、私も行くよ。」

「ありがとー未来ー。」

「で、その男子、なんて名前なの？」

「確かねえ……津谷^{ったに}陸^{つたに}って言っただって。」

「津谷、陸……あれ？……どこかで聞いたことあるような……？」

「ん？もしかして、知り合い？」

「いや、多分気のせいだと思う……多分。」

「そっか。じゃあ放課後に津谷君の所に行ってみようー！」

綾子は意気揚々と自分の席に戻っていった。

部活

私は今、演劇部の活動拠点 講堂にいる。

今の時期、演劇部は、活動してはいなく、色々な生徒に勧誘をしてまわっている……いわば、勧誘期間真っ盛りなのだ。で、今日は勧誘方法の作戦会議の真っ最中。

関係者以外立ち入り禁止なので、綾子には講堂の外で待ってもらっている。

会議終了。

ある生徒はそのまま帰り、ある生徒は勧誘に行った。

私は、ちょうど津谷陸の話を出したところ、そいつを勧誘しにいけと言われたので、綾子と一緒に行くことにした。

「ついた、ここだよ。」

1年3組の教室前に到着。

「でもさ、綾子。もう放課後だし、さすがに帰っちゃったかな？」

意外と会議が長引いたし、有り得るかも。

「いやいや、聞いた話によると、津谷君は、辺りが暗くなるまで帰らないらしいよ。もしかしたらまだいるかも。」

綾子はそう言いながら、教室の扉をノックした。

ガラッと、扉が開く。

「はーい？……あれ？」

そこにいたのは 見たことのある人物だった。

再会

噂の男子、津谷陸。

その容姿は、眼鏡をかけてはいるが、確かに顔立ちがよく、見た女子全員が惚れてしまうのも頷ける。

そして、彼の顔には、見覚えがあった。

「えっと……誰？」

彼は綾子の顔を見ながら質問した。

「私達、演劇部の勧誘で来たんだけど……。」

演劇部でも無い綾子が話し始めた。

「演劇部？」

「あつ、私は演劇部じゃなくて、こっちが演劇部なの。」
と、言いながら、綾子は私の方を見た。

「えっと、そっちの人は……もしかして、安藤未来？」
名前を言い当てられた。

やっぱり、私はこの人に会ったことがある。

「……もしかして、陸？」

「やっぱり、未来だよな！？」

陸の顔が一気に明るくなった。

「未来だあー！久しぶりーっ！！」

そして、あろう事か、私に飛びついてきた。

「うわっ！？ちよつと、陸！離れなさい！！」

「え？あ、ごめんっ。」

陸は私から離れた。

その光景に、綾子は目を丸くしていた。

「え？え？……未来、津谷君と知り合いなの？」

「えっと……私の、従兄弟なの。」

「い、従兄弟お！？…初耳なんだけど！？」

「私も、会うまで忘れてたのよ。」

それを聞き、陸が食いついた。

「未来、忘れるなんてひどいよ。」

「ご、ごめん……。」

なんか、綾子と陸って、キャラがかぶってる気がする……。

「……で？今日はどうしたんだっけ？」

陸がワクワクしながら聞いてきた。……従兄弟相手に勧誘って、なんとなく罪悪感が……。

「えっ……と、陸、何部に入るか決めた？」

「んー……まだ。」

「演劇部とか、どう？」

「演劇部ねー……まだ迷ってる。でも、未来が入ってほしいって言うなら、入るけど？」

「じゃあ、頼めるかな？」

「おう。……顧問に入部届け、出せばいいんだっけ？」

「うん、それじゃ、またね。」

「はーいっ。」

私たちは、講堂に戻ることにした。

報告

講堂に戻ると、紅丞さんが勧誘に行かせた生徒を待っていた。

「紅丞先輩！」

紅丞さんに駆け寄る。

「あ、やっぱり未来だったか。」

「” やっぱり ” って、どういう事ですか？」

「未来の足音が聞こえたんだよ。」

「あ、そう言うことですか……。」

紅丞さんは、4月の始めから、月の中頃にかけて、ある事件が原因で、人間ではなく天使になってしまっていた。のだが、カラスのアイデアのおかげで、無事、人間に帰ることが出来た。

でも、完璧な人間ではなく、私のように、人間ではない力を持つ事になってしまったのだ。

その力と言うのが、「五感がランダムにパワーアップする」というもの。

簡単に説明すると、特に何もしていないのに、聴覚・嗅覚・味覚・触覚・視覚のうちどれかが、ランダムに選ばれ、飛躍的にパワーアップしてしまうということ。

……パワーアップの限度は決まっているようなのだが、どのタイミングで、何をパワーアップさせるのか、は選べないようで、本人はいまだに慣れることが出来ずに困っているらしい。

この前なんか、睡眠中に聴覚がパワーアップしてしまって、自分の心臓の音が邪魔で一睡も出来なかった、と語っていた。

「……てことは、今、聴覚がパワーアップしてる、って事ですか？」

私は綾子から離れ、綾子には聞こえないくらいの小声で質問した

小声でも、今の紅丞さんには普通の音量に聞こえるだろう。

「ああ。……ついでに言うと、嗅覚もパワーアップしてる。」

「それは、大変ですね。」

「大丈夫だよ。」

小声で会話する私たちの後ろで、綾子がニヤニヤしながら私たちを見ていた。

「……ちよつとすみません。」

紅丞さんに断りを入れ、綾子の元へ向かう。

「ちよつと、綾子。何ニヤニヤしてんのよ。」

「いやあー、小声で何話してんのかなーなんて思っ……」

「別に、何でもいいでしょ？……気にしないでよ。」

「カップルの会話ほど気になるものはないよ？」

「はあ……ったく……」

「で？先輩に津谷君の事、言っ……」

「あ、言っ……てなかった。」

「……未来い、最近凡ミス多いよ？幸せ疲れですかあ？」

「嫌みつたらしく言わなくていいから。」

とりあえず先輩の所に戻る。

「……紅丞さん、聞いてました？」

また小声で話しかける。

「ああ。……新入部員か？」

「はい、それも、私の従兄弟なんです。会っ……だいたい、5年ぶりくらい何ですけどね。」

「へえ……従兄弟……」

……何故ジト目……

「私、別に浮気しませんから。」

「まあ、それなら良いけど……」

すると

「あつ……」

「どうしました？」

「嗅覚が元に戻った……。あ、でも視覚がパワーアップした……」

「……なかなか休まりませんね。」

「ああ……本当、困ってるよ……。」

その時、

「未来ー、何してんのー。」

しびれを切らした綾子が私を呼んだ。

「……なんか、すみません。やっぱり綾子は帰らせるべきでしたね……。」

「いや、別に大丈夫だけど……。」

私は再び綾子の元へ行った。

「……未来くん、愛し合うのは構わないが、私の存在を忘れないでくれよ?」

「わかってるよ……。」

「……じゃ、私、用事思い出したんで、帰るよ。後は2人でお幸せにー。そんじやつ。」

綾子はカバンを持って帰ってしまった。

「なんなのよ、まったく……。」

「未来。」

後ろから紅丞さんが私を呼んだ。

「何でしょう?」

「俺たちも、もう帰るか。」

「でも、ほかの部員を待たなくていいんですか?」

「いや、ほかの奴らは、さっき帰った。」

「え、じゃあ私が最後の1人って事ですか?」

「そう言うことだ。……じゃ、帰るか。」

紅丞さんは、近くにおいてあるカバンを持って歩き出した。
私
も後に続いた。

手紙

「紅丞さん、ちょっと、教室に行きたいんですけど、良いですか？」
「忘れ物か？」

「はい。……ノート忘れちゃって。」

「わかった、一緒に行くか。」

「はい、ありがとうございます。」

俺と未来は、2年4組の教室に向かった。

「ちょっと待っててくださいね。」

未来は俺を入り口に残し、教室に入った。

窓側の、一番後ろ。恐らくそこが、未来の席だろう。

「……あれ？」

机の中を探していた未来が、そう呟いたのが聞こえた。

「未来？どうかしたのか？」

「なんか、手紙が入ってるんです……。」

手紙？まさか……ラブレター？

俺はとりあえず教室に入った。

「あ、勝手に入っちゃダメですよ。」

「いいだろ……で、手紙ってなんだ？」

「これです。」

未来が机から出したのは、茶封筒に入った手紙だった。……「こ丁寧に、封に糊付けされている。」

「誰からだ？」

「差出人が書かれてないんです……開けて見ますか？」

「未来が見たいと思うなら、開けてもいいんじゃないか？」

「では、失礼して……。」

未来は指で器用に封筒を開け、中から手紙を取り出した。

「な、何？これ……。」

未来の顔が真っ青になった。俺も手紙を覗いてみた。

手紙には、まるで血のような真っ赤な字で、”お前に絶望を味あわせてやる。”とだけ書いてあった。

「不気味だな……。」

「一体誰が……。」

未来は脅えるように、封筒に手紙をしまった。

「未来、そんな物、捨てた方がいい。どうせ誰かのイタズラだろ。」

「そう……ですかね。」

「ああ。…何かあっても、俺が守ってやる。」

「紅丞さん……ありがとうございます。」

未来は、手紙を封筒ごと、くしゃくしゃに丸めてゴミ箱に捨てた。

「……それでは、帰りましょうか。」

「ああ。」

俺たちは玄関へ歩き出した。

…誰かのイタズラにしては、やり過ぎだと思う。だって、あの手紙の字……未来には言えなかったが、俺は今、視覚がパワーアップしているの解る。

あの字は、どう見ても 人間の血で書かれていた。

……妙な胸騒ぎがする。

帰る前に……

「紅丞さん、聴覚、今どうなってます？」

玄関で、未来が俺に質問する。

「まだパワーアップしたままだ……。」

「そうですか……。それでは、聴覚が戻るまで、少し待ちますか？ 今外にでると、車が凄いいみたいですし……。」

確かに、玄関からでも、外の車の走行音が耳に入る。

「そうだな……。少し待つか。」

とりあえず、廊下にあるベンチに、二人で腰を下ろした。

……しばしの沈黙。遠くにある体育館からは、バスケットボールが弾む音が聞こえる。多分、バスケット部が部活中なのだろう。……それよりも……

「……未来。」

「何ですか？」

「もう少しくつついてもいいんじゃないのか？」

未来は何故か、俺から30cmくらい離れた所に座っていた。

「いや、だって、私が近寄ったら色々面倒になるかな、と思いまして……。」

「面倒？ ……どういう意味だよ？」

軽く未来を睨む。

「いや、その……紅丞さん、今聴覚がパワーアップしてるんですよ？ じゃあ私が近寄ったら、私の心臓の音が聞こえて、耳障りかなーと思ひまして……。」

未来は申し訳無さそうに答えた。

「はあ……。今更何言ってるんだよ。」

「えっ……？」

「俺は、例え未来の心臓の音が絶えず聞こえるような環境に置かれても、その音さえも愛せるといふ自信があるぞ。」

「……………」

未来の顔が赤くなった　可愛い奴だな。

「あ、ありがとうございます……………」

未来は恥ずかしそうに、俺にくつつくように座り直した。

トクツ、トクツ　…………直接聞いているわけじゃないのに、未来の心臓の音が鮮明に聞こえる。…………もちろん俺自身の心臓の音も鮮明に聞こえる。

実は、脈拍が違う2つの音が、偶然重なる時があるのだが、俺はその音が好きなんだ。…………未来には内緒だけだな。

「ふふつ……………」

つい、口元が緩んでしまった。

「紅丞さん？…………今、笑いました？」

「いや、ちょうど、未来と俺の心臓の鼓動が、ほぼ同じくらいのタイミングで重なって…………なんか面白くて……………」

そう言った途端、未来の心臓の鼓動が速まった。…………ああ…………タイミングがズれていく……………」

「おい、何照れてんだよ、タイミングがズレたじゃないか……………」

「うつ、うるさいです。気にしないでください……………」

「そうは言っても、聞こえちまうしなあ……………」

俺は嫌みっぽく答えた。

「…………やっぱり私、離れた方がいいですか？」

「いやいや、そんなこと言っていないから……………」

「でも……………」

その時

キーン……………」

酷い耳鳴りが俺を襲った。

「つ……………」

思わず頭を抑える。

「紅丞さん？……どうしたんですか？」

「いや、ちよつと耳鳴りが……。」

数秒後、ようやく耳鳴りが止んだ。

と、同時に、心臓の音が聞こえなくなつた。

「……聴覚が元に戻つたみたいだ。」

「そうですか。……それじゃあ、帰りましょうか。」

未来は立ち上がった。……俺も後に続いた。

帰り道

「未来、手、繋ぐか。」

急に、紅丞さんからそう言われた。

「……今はほかの生徒もいないみたいですし……良いですよ。」

私は、無防備だった紅丞さんの右手に自分の左手を　俗に言う、

”カップル繋ぎ”してやった。

「え？こ、これって、カップル繋ぎ？」

紅丞さんが予想以上に焦っている。

「何焦ってるんですか？紅丞さんから誘ったんですよ？」

「いや、そうだけど……。」

紅丞さんは恥ずかしがって俯いてしまった。……なんか可愛い。

「さあ、行きましようか。」

私たちは家に向けて歩き出した。

「そういえば、紅丞さん。」

「何だ？」

「今、視覚がパワーアップしてるんですよね？」

「ああ……2キロ先の道路標識が見える。」

「視覚がパワーアップするって、視力が上がるだけなんですか？」

「いや、高速で動く物が見えたり、見えちゃいけない物が見えたりする。」

「見えちゃいけない物って、何ですか？」

「それは、アレだよ、その………忘れてくれ。」

「嫌です、教えてください。」

「……………」

「紅丞さん？」

「お、俺は悪くないぞ。視覚が勝手にパワーアップするから。」

「言い訳なんて聞きたくないです。何が見えてるのか教えてください。」

「……………」

次の瞬間、紅丞さんは私の手を振りほどき、走り出した。

「あっ！！紅丞さん、逃げないでください！！」

紅丞さんは、男のくせに体力がそんなに無い。……女とはいえ、中学時代は空手を習っていた私に適うはずがなかった。

私は紅丞さんの腕を掴んだ。

「ほら、捕まえましたよ！！」

「！？…………お前速すぎるんだよ！！」

「紅丞さんが遅いんです！！さあ、もう逃げられませんか！」

「頼む！許してくれ！！」

「許す許さないの問題ではなく、言う言わないの問題でしょう!？」

「つ…………じゃあ、言わない！！」

子供か、まったく…………でも、私もそろそろ気にし過ぎかもしれない。

「はあ…………わかりました。このことは忘れます…………」

「助かった…………あつ…………」

「どうしました？」

「視覚が元に戻った……………」

「てことは、今は普通の状態ってことですか？」

「…………いや、触覚と味覚が一気にパワーアップした…………」

「触覚って、ヤバいじゃないですか。」

「風が身体に当たって痛い……………」

「大丈夫ですか?…早く帰りましょう。」

「だな……………」

紅丞さんは痛みに耐えながら、足早に帰宅した。

自宅

「痛ってえー……。」

紅丞さんは玄関に入るなり、私に寄りかかって来た。

「だ、大丈夫ですか!？」

「平気……ただ、足痛い……。」

「それ平気じゃないですよ!ー!しっかりしてください!ー!」

玄関での騒ぎを聞きつけたのか、家の奥から 그레이 が走って来た。

「未来ちゃん!紅丞!ー!どうかしたの!？」

「あつ、그레이……紅丞さんが……。」

「紅丞、大丈夫?」

「全然……身体中痛すぎる……。」

何で私には”平気”って言うておいて、그레이には”全然”なのだろう…。

「とにかく、一度部屋に運ぶから、그레이、手伝って。」

「うん。」

部屋に入り、紅丞さんをベッドに寝かせた。

「痛っ…なあ、もう少し優しくしてくれないか?」

「男なんですから、耐えてくださいよ。」

「でも……痛い……。」

触覚がパワーアップすると、文字通り、触る感覚が鋭くなるので、そよ風とか雨とかが痛く感じる……らしい。

以前、いたずらで耳に息をフーッとやった時にはキレられた。…紅丞さん、キレると意外に怖い。

「紅丞、まだ痛む?」

「うん……しばらくほつといてくれ……そのうち元に戻るから……。」
「わかった。」

「紅丞さん、何かあったら遠慮せずに言ってくださいね?」

「ああ……ありがとう、未来。」

「……じゃあ、私たち、リビングにいるますから、元に戻ったら降りて来てくださいね。」

「わかった……。」

私とグレイは部屋を後にした。

「ねえ、グレイ。紅丞さんの事なんだけど……。」

「紅丞が、どうかした?」

「あの”五感がパワーアップ”する力、どうにかならないかな?その……操れるようになる、とか。あのままじゃあまりにも紅丞さん可哀そうで……。」

「気持ちはわかるけど、さすがにそれは僕にもカラスにもどうしようもないよ。紅丞が慣れるようにならないと……。」

「でも、触覚がパワーアップしたり、聴覚がパワーアップしたりすると、さすがに生活に支障がでてしまうし……。」

「うーん……一応、姉ちゃんに相談してみるよ。」

「メルに?どうして?」

「姉ちゃんは吸血鬼よりの天使だし、もしかしたら、何か知ってるかもしれないからね。」

「ふーん……確か、グレイとメルさんって、腹違いの姉妹……なんだっけ?」

「うん。姉ちゃんは僕のパパが僕のママに会う前に会った吸血鬼の間に生まれた子だからね。」

今、物凄くわかりづらい言い方された気がする。

「と、とにかく……メルに聞けば何かわかる?」

「あくまで可能性だけだね。」

「わかった。ありがとう。」

その時 携帯のバイブが鳴った。ディスプレイには知らない電話番号が載っていた。

「……誰だろう？」

出てみた。

「もしもし！」

…陸だった。

「陸！？…あんた、私の電話番号知ってたっけ？」

「いや、あの後、日比野綾子って人を見つけて、聞き出した。」

綾子…なんてことを…。

「未来ちゃん、どちらさま？」

後ろから 그레이가 声をかける。

私は携帯のマイク部分を抑えながら

「私の従兄弟。…ちよつと待っててね。」

再び携帯を耳にあてる。

「で、陸、何の用？」

「ちよつと聞きたいことがあってな。……未来、彼氏いるって本当か？」

「え？あ、まあ一応……綾子から聞いたの？」

「うん。……驚いたよ、まさか未来に彼氏がなあー…未来って、同性愛者だったっけ？」

「違う。」

即答しといた。

「え？違うの？てつきりそうかと…。」

「んなわけないでしょ、女の時の私の彼氏よ。」

「じゃあ、男の時はどうやって接してるんだ？」

「男の時は…女になるまで接してない。」

「っていうか、男になった時は速攻、暁文や 그레이 に血を分けて女にしてもらってるから……なんて、陸に言えるわけない。」

「てか……あれ？確か未来って、怪我すると性別変わるんだよね？」

「いや、それ、違うみたいで……最近わかったんだけど、大量出血すると性別が変わるらしいのよ。」

「てことは、いつも大量出血して性別を変えてる……ってことか？何のために？」

「何のためって……。」

「考えてなかった…。」

「未来？もしもし？」

「あ、ごめん、その……何のために変えてるのは、ちょっと言えない…かな。」

「ふーん…まあいいや。んじゃ、そろそろ切るぜ。」

「うん、またね、陸。」

「おうっ。」

電話を切り、携帯をしまう。

「未来ちゃん、従兄弟って……未来ちゃんの性別の事知ってるの？」

「うん。」

「その人、学校の友達？」

「友達って言うか……後輩、かな。会ったのは5年ぶりなんだ。」

「5年ぶりってことは、小学校以来、ってこと？」

「そういうことになるね。懐かしいなー…小学生の時はずっと一緒に遊んでたよ、家が近所だったし。」

「へえー……。」

なぜか 그레이 がニヤニヤしながらこちらを見ている。

「…… 그레이、何か企んでる？」

「い、いやっ、別に？」

あ、目え逸らした。

「グレイ？」

軽く睨む。

「いや、その……ただ、従兄弟だったら、小さいころ、未来ちゃんがどついう子供だったのか知ってるのかなー？とか思ってた……」

「ああー……」

小さいころの私……か。そういえば1度もそういう話をしたことが無かった。

まあ、簡単に言うと、小さいころの私は、小学校、中学校と、9年間、立て続けにイジメにあっていた。

ことあるごとに暴力を受け、そのたびに性別を無理矢理変えられて……という毎日だった気がする。

気がするっていうか……正直な話、辛^{つら}すぎて無意識のうちに記憶から消去してしまった部分があるので、詳しくは覚えていない。

「……ま、そのうち話すよ。」

「うん。楽しみにしてるね。」

多分、話す事はないだろう。グレイには刺激が強すぎるかもしれない。こういう約束は自然に忘れてもらった方がいい。

「未来、帰ったのか？」

玄関の奥の方から暁文が歩いてきた。

「あ、うん、ただいま。」

「おかえり。……今、いいか？」

私は小さく頷き、暁文に近づく。

暁文は私を抱き寄せ、首筋の噛み痕にあわせるように歯を突き刺した。

「痛つ……暁文、グレイがいるんだから、もう少し慎重にやったほうがいいんじゃない……？」

「ん……そうだな。」

暁文は私から離れ、肩を掴み、吸血した。

「……終わったぞ。」

暁文は俺から離れた。

俺はゆっくりとソファに座る。

「なあ、未来。」

「何？」

「出来れば、今度から背伸びしてくれないか？……歯が刺しづらいからさ。」

「解った。でも、それだったら、座って吸血した方がよくないか？」

「まあ、最初はそうだったけど……今は立ったままの方がやりやすいんだ。」

「ふーん……じゃあ、次からは背伸びすればいいんだな？」

「ああ、頼む。」

暁文はそう言うと、リビングの隅にかけてられているコートを着ると、リビングを出て行こうとした。

「暁文、どこ行くんだ？」

「ちよっと、アルトのところに。」

「グレイは、一緒には行かないのか？」

「グレイは……どうする？」

暁文はグレイを見ながら質問した。

「他の吸血鬼のところには行きたくない……。」

「じゃ、未来と一緒にここにいてくれ。多分、夕方には帰ってくるから。」

「うん、気をつけてね。」

「ああ。」

暁文はリビングの扉を開けると、俺たちに背を向けたままこう言った。

「……未来、グレイに変な事するなよ？」

「したこと無いだろ！」

素早く反論すると、暁文は逃げるように家を出ていった。

「ったく……あの性悪吸血鬼……。」

無意識に、そう呟いた。

「未来ちゃん！そういうこと言っちゃ駄目だよ！！」

ヤバ、聞かれてた。

「ご、ごめんなさい……。」

暁文とグレイは相思相愛の仲だから、互いの悪口を誰かが言っているのはとにかく許せないのだそうなの。

謝っても、グレイの瞳は黒いままだった。

「悪かったって……機嫌直してくれよ。」

とりあえず撫でながら謝罪する。

グレイは、吸血鬼とはいえ、天使の血が混ざった吸血鬼。撫でられるのには弱いのか、たちまち瞳がピンク色になっていく。

「もうっ……。」

最後には、機嫌を直してくれたようだ。

すると

ピンポン

家のチャイムが鳴った。とりあえずでることに。

「はい。」

玄関に行き、扉を開けると、そこにいたのは

「よっ！未来！」

陸だった。

従兄弟

「……え？」

俺はつい、その場で硬直してしまった。

「おい、未来ー？」

陸がわざとらしく俺の眼前で手を振る。

「えっ？あぁっ……え？」

……なぜ、ここが解ったのだろうか？俺と紅丞さんが同棲している事は綾子しか知らないはず　あ、だからか？

「いや、”え？”はこっちの台詞だよ。いつ性別変わったんだ？さつき電話したときは女だったろ？」

そうだった。まずい、話題を変えねば……。

「えっと……綾子に聞いたのか？」

「え？何を？」

「ここを。」

「え？……あぁ、うん。”従兄弟なら”って、特別に教えてもらっただんだ。」

綾子の奴……でも、陸なら良いか。

「陸、わかってると思うけど、このことは」

「わかってるわかってる。これだろ？」

陸は自分の口の前に人差し指を立て、”静かに”のポーズをした。話が早くて助かる。

「とはいえ、詳しい場所までは教えてもらってなくてさ。その辺歩いてる人に道聞いちゃったよ。」

陸は、少し照れながら答えた。　って、その辺歩いてる人？

「……なあ、陸。」

「ん？」

「その…今言ってた、歩いてる人って、どういう人だった？」

「えっと…かなり長身で、コート着てる、男の人だった。」

……暁文だ。

「そ、そうか……。」

「にしてもさ、その人、目が赤かったんだよ。それに、天気良いの
に、フード被ってたし……これじゃあまるで」

陸は、俺の目を見ながら、こう言った。

「吸血鬼。みたいだよな？」

瞬間、俺は、脳内の隅から隅まで凍り付くような感覚に襲われた。

「……って、未来？顔真っ青だけど、大丈夫か？」

「えっ？……あぁっ、大丈夫、大丈夫……。」

嘘だ。ちつとも大丈夫じゃない。

「な、なあ、陸。どうして、その人が吸血鬼だって思ったんだ？」

「いや、俺が今読んでるネット小説に出てくる吸血鬼の特徴と似て
たからさ。長い八重歯もそうだし。」

……なあんだ。そう言うことか……。

「未来ちゃん、どちらさまだったのー？」

ふと、リビングから 그레이 が歩いてきた。

「あっ。」

そして、陸の姿をとらえた。……どうやらもう帰ったと思って出て

きたらしい。

「うおっ！？未来、あいつ誰！？めっちゃめっちゃ可愛いじゃん！」「え、あ、いや、その……。」

陸の言葉に、グレイが頬を赤く染めた。 やめなさい、グレイ。それやっちゃうとマジで可愛いから。

「し、知り合いの子だよ。……ちよつと待ってて。」

俺は慌ててグレイをリビングの奥に引っ込めた。

「知り合いの子って……金髪だったぞ？あの歳で髪染めるのって、やばくない？」

「か、海外の子なんだよ……。」

ちよつと苦しい誤魔化し。

「ふうん……ま、いっか。じゃ、俺、もう帰るわ。」

「ああ、またな、陸。」

「おうつ、んじゃな！。」

陸は元気に返事を返し、家を出ていった。

陸

どうしても、解らないことが1つだけある。

俺が、未来の住んでいる家に行く道中に遭った、あの吸血鬼。

そして、未来と話している最中に現れた、あのめっちゃめっちゃ可愛い吸血鬼。

未来はどっちの吸血鬼のパートナーなんだ？

同じパートナーをやっている身でこんなことを言うのはちよつと酷だが、未来には、吸血鬼のパートナーは合わないと思う。

……だって、出血で性別が変わるんだぜ？さっきだって、電話した後に会ったらもう男になってたし……っていうか、その事聞いたら無理矢理話題逸らされたし……

恐らく、電話のすぐ後に血を与えたんだろう。

……不安だ。自分の従姉妹が吸血鬼のパートナーをしている……これほど不安なことはない。

未来と俺は、共に一人っ子。だから、小さい頃は、本当の姉弟のように接していた。もはやそこには、従姉妹なんて壁はなかった気がする。

だから、不安なのだ。自分の姉の安否が、無性に心配になってしまふのだ。

……でも、本人は至って楽しそうだし……それならそれで、良いのかな？

不安を抱えつつ、俺は自分の家の扉を開ける。

”ただいま。”を言う前に、俺は何かを抱きつかれた。

「おかえりっ、陸。」

声の主は、耳元で歓迎される。

「ああ、ただいま。 メル。」

俺は、それなりに呆れた声で答えた。

セーフ？

危なかった……。

暁文の事について訊かれるわ、 그레이の姿は見られるわ、男になったことを問われるわで……災難だった。

「はぁ……。」

俺は意気消沈のまま、 그레이のいるリビングへと戻った。

「未来ちゃん……ごめんね。もう帰ったのかと思って……。」

그레이は相当後悔しているようだった。瞳が青い。

「いや、平気……あいつが、さっき電話で話した従兄弟だよ。」

「ふーん……なんか、大人しそうな人だったね。」

「そうか？ちびだし、結構やんちゃだぞ？」

昔の話だが、多分今もそうだろう。

「駄目だよ、従兄弟をちびって言うちゃあ。……僕も結構気にしてるんだし。」

「ああ、そうだったな……ごめん。」

その時

「未来ー。」

俺の名前を呼びながら、紅丞さんが2階から降りてきた。

「……って、なんだ。男になってたのか……。」

なぜか、俺の顔を見て、少し残念そうな顔をした。

「別にいいじゃないですか……。」

「まあそうだけど。」

「紅丞、僕、お腹空いちゃったよ。」

何か言おうとしていた紅丞さんを止めるように、 그레이が血を催促する。

「ああ、解った。」

紅丞さんはグレイに近付き、その場にしゃがむ
グレイは紅丞さんに抱き着くようにしがみ付き、吸血を始めた。

うーん、なんかちょっとジェラシー。……って、何言ってるんだ俺。

「……ありがとう、紅丞。」

「ああ。」

グレイは紅丞さんから離れると、足早に部屋へと戻ってしまった。

「よいしょつ。」

紅丞さんはフラフラしつつ、立ちあがった。

「紅丞さん、大丈夫ですか？」

「ああ、平気。…俺、ちょっと部屋で休んでくるわ。」

そう言うのと、ゆっくりと階段を上って部屋へと行ってしまった。
。

「……はあ、暇だな……。」

玄関で1人。…こういう時は

そうだ、買い物に行こう。

俺は財布と携帯、家の鍵を持ち、コートを着て家を出た。

アルト

「暖かいなあ……。」

周りに誰もいなく、1人なのをいいことに、未来は独り言を呟きながら桜公園の横の道を歩いていった。手には、コンビニの袋をぶら下げている。

……っというか、いくら暖かいとはいえ、後ろを歩いている俺に気付いてもいいのではないだろうか？

「未来！」

仕方なく後ろから声をかける。

「っ！？」

未来は物凄く驚いた顔で振り向いた。

「あ……アルトじゃないか！……久しぶりだな、こんなところで何やってんだ？」

未来は驚きを隠しつつ話しかける。

「……お前、」誰もいないと思って独り言を言ったけど、それを俺に聞かれて恥ずかしいから」ちよつと誤魔化そうとしてないか？」

「え、あ、いや、あの……みんなには、内緒にしてくれないか？」

「言われなくてもそうするつもりだ。……ったく、無防備だなお前も。夏子とは大違いだ。」

「夏子って……誰だ？」

「ん？……ああ、言ってなかったか。夏子は俺のパートナーだ、歳は大体お前と同じくらいだな。

人見知りで人間不信……簡単に言うつと、たいして命を狙われてもいないのに、無駄に自分を防衛したがるタイプ……って感じたな。」

「へえ……でも、確かアルトも、人間嫌いじゃなかったっけ？」

「ああ、もう慣れた。」

「え、そうなのか？」

「……じゃなかったら俺は未来に話しかけてないぞ？」

「それもそうか……ところで、アルト。」

「何だ？」

「暁文はどうしたんだ？……さっき、アルトのところに行くって出てったはずだけど……。」

「ああ、アカツキさんなら、確かにさっき、俺のところに来たよ。軽く世間話した後、すぐメルのところに行っちゃったけどな。」

「メルの所に？……そういえば、メルってパートナーいるのかな？」

「いるらしいぞ？だいたい未来よりも2歳年下らしい。」

「ふーん……。」

「……なあ、未来、ちょっと頼んでもいいか？」

「なんだよ？」

「俺、今腹減ってんだけどさ、お前の血、少しでいいから分けてくれないか？」

瞬間、未来はかなり驚いた顔をしていた。

「……は？今、なんて？」

「いや、だから、腹減ったから、血、分けてほしいんだけど。」

「っ……いやいやいや！無理に決まってるだろ！ふざけんなー！」

「はあ？なんでだよ。俺はもう向こうの^{吸血鬼界}の世界での権利はとつくと剥奪されてるから多重契約してもいいはずだが？」

「そういう問題じゃねえよ！！血が欲しいんならパートナーからも

「らえばいいだろ!？」

その言葉に、俺は呆れてため息をついた。

「はああ……解ってねえな、お前も。」

「え……？」

「俺がお前の血を欲しがってるってことは、要するに、”性別人間の性別が変わるところが見たい”ってことだろ。解んねえのか？」

「え、いやっ……確かに、俺は吸血鬼界では結構有名みたいだけど、なんでそんな……」

未来は困惑の表情を浮かべている。どうすればいいのか解らないようだ。

「なあ、いいだろ？未来。ちょっとだけ。」

「……。」

未来は戸惑いながら辺りを見渡し

「……ちょっとだけなら。」

了承は得た。

俺は未来に近付き、肩を掴み、口を首に近付け、歯を刺した。

「っ……。」

歯を刺した瞬間、未来の身体が痙攣した。

「……安心しろ、すぐ終わるから。」

「……暁文はいつもそう言っ、物凄い速さで吸血していくんだけど……。」

「だから、安心しろって。俺はそんなことしないから。」

「ほ、本当か？」

「……嘘ついて何の意味があるんだよ。」

呆れながら、血が溢れる噛み痕に吸いついた。

甘い。

吸血鬼の血を飲んだ人間の血は甘いという話だが、未来の場合は2人の吸血鬼の血を飲んだから、正直言うとめっちゃめっちゃ甘い。

何度が吸っていると、未来の身体に変化が現れた。

身体が女性化していく。

身長は変わらないまま、体格や髪型、髪の色さえも変化していく。

「あ……アルト……もう、離して……。」

女声で頼まれた。仕方なく離す。

未来から離れ、改めてその姿を見る。

男の時の未来は、髪はショートヘアで黒色、肌も普通で、少し童顔っぽい顔だった気がする。

それに比べて、女の時は、肌の色は変わらなくても、髪はセミロングまで伸び、栗のような茶色に染まっていた。顔も少し大人っぽい。

「へえ……流石性別人間さすが。男と女じゃ見た目が違うな。」

「……そりゃあ、性別が変わるんだから、見た目もそのままじゃないでしょ……。」

未来は呆れながら呟いた。

「?……その様子だと、口調も変わってるみたいだな。」

「うん。男と女で口調が変わるみたい。性格は同じだけど。……っていうか、私、向こうの世界で噂になってるんだよね?そこら辺は解らなかったの?」

「ああ、お前はただ”性別が変わる人間”としか言われてないから、詳しいとこまでは解らないんだ。」

「ふーん……じゃあ、私、そろそろ行くね?」

「おう、今日はありがとな。」

「うん。それじゃ、また。」

未来は踵を返し、再び歩いて行った。

噂の性別人間、やはり凄い奴だった。

性別が変わるというのも凄い話だが、本人はそのことに一切”嫌”という表情をしていなかった。

……確かに、吸血鬼界では、未来は”性別が変わる人間”ということと、”正義感が強い”という情報が1番多く広まってはいるが、それ以外に、”完璧な人間だ”とも言われている。

初め、俺はその意味がよくわからなかったが、未来に会って、初めてその意味が分かった。

性別が変わる事を、受け入れている。

…完璧だな、確かに。

アカツキさんは大丈夫だろうか？

だって、アカツキさんは完璧というよりむしろ

……やめよう。こんな話はするべきではない。

「……ただいまー。」

家にたどり着き、扉を開けて中に入る。

「おかえり、アルト。」

中から、俺のパートナー 夏子が迎え入れてくれた。

夏子も、正直言つと普通の人間ではないのだが……

その話は、また今度でいいか。

冤罪

「ただいまー。」

玄関の扉を開けて中に入った。

「あつ、未来ちゃん、探したよ?」

グレイがリビングから飛び出してきた。

「え、私を?……ああ、出かけるって伝えてなかった……ごめんなさい。」

「別にいいけど……どこ行って来たの?コンビニ?」

「うん。少し買い出しにね。あ、その途中でアルトに会ったよ。」

そう言った瞬間、グレイの瞳の色が青色になった。

「え……アルトに?」

「そう、だけど……。」

言わない方がよかったかな?

「もしかして、血、吸われなかった?」

「え?……ああ、実はそうなんだよね……。」

確かに、さつき男で、今は女……そりゃあ吸血されたことを疑うわけだ。

「そつか……アルトに会ったんだ……。」

グレイの表情は落ち込む一方だった。

……多分、これ以上踏み込んではいけないのだろう。

その瞬間、ガチャツと扉が開き

「よっ。」

暁文が入って来た。

「アカツキー。」

グレイが笑顔で暁文に近付く。

暁文はグレイの頭を撫でながら

「おう、グレイ。未来に何かされなかったか？」

……だから何もしてないっつーの！！！！

不安

その日の夜、部屋でのんびりしていると、紅丞さんが入ってきた。

「未来、ちょっといいか？」

「なんですか？」

「今日学校で見たあの手紙の事なんだが……。」

「手紙って、あの悪戯の事ですか？」

「実は、あの手紙、悪戯じゃないかも知れないんだ。」

「え？……どういう事ですか？」

とりあえず紅丞さんを部屋に招き、詳しく話を聞くことに。

「……俺、あの手紙を見たときさ、視覚がパワーアップしてたんだよ。」

「確か、そうでしたね……。」

「その時にわかったんだけど……あの手紙の字、人の血で書かれてたんだ。」

「えっ！？……人の血、ですか？」

紅丞さんは小さく頷いた。

「……ますます不気味ですね……。」

「ああ。……あの後、何かおかしいことはなかったか？」

「いえ、特にありませんでした。」

「そうか……もしも、何かあったら、すぐに俺に言えよ？」

「はい、解りました。」

「……それじゃ。」

そう言くと、紅丞さんは部屋を出て行ってしまった。

……人間の血……か。

以前、中学の時にイジメを受けていたときは、出血した私の血で教

科書類に悪戯書きされたことはあったけどなー……他人の血は初めてだ。

人間の血を簡単に入手することができるのは、吸血鬼ぐらいしかないだろう。

…手紙を入れた本人が自分の血を使って描いた可能性も無くはないが、それだったら赤いペンキを使ってもいいだろう。わざわざ自分の血を使って危険を被る必要がどこにある？

紅丞さんは”何かあったら、すぐ俺に言え”と言っていたが……。
軽々と言って、危険な事に巻き込んでしまったらと思うと身の毛が
立つ。何かあっても絶対言わない。

「はあー……。」

深くため息をつき、ベッドに腰を下ろす。

……中学の時にイジメを受けていた事を少しだけ思い出した。

些細な事で大けがをして大量出血……大体そこから歯車が狂ったんだよな……。

ことあるごとに体育館裏とかに呼び出され、断れば「性別の事を周りに広める。」と脅され、行ったら行つたで暴力受けて……

先生に相談しようにも向こうも私から遠ざかり……とにかく居場所が無かった。

まあ、小学校も似たような感じだったし、中学で大量出血したときは「ああ、また同じ事されるんだな。」という印象しかなかった。

……怖くなんかない。イジメはもう慣れた。怖いなんて思っていない……はず。

「……寝よつかな。」

考えても仕方がない。何かあつたらあつたで、私には強運があるからどーにかなるはずだ。2回も誘拐された経験上そう言える。

私はベッドに潜り、少々早い時間に眠りについた。

不安（後書き）

紅白なう 今年もあと2時間弱！！盛り上がってまいりました！！

何でもない朝（前書き）

あけましておめでとうございます。今年も1年、「性別人間シリーズ」をよろしくおねがいいたします。

何でもない朝

朝。

7時。マンションに住んでいた頃と違い、だいぶ遅い時間に目が覚めた。

…まあ、学校から遠いマンションから、学校に近い紅丞さんの家に移住したから、たいして遅くても問題ないわけなただけ。

眠い目を擦りながらリビングの扉を開ける。

リビングには、案の定誰もいなかった。

暁文はマンションの方の私の家において、吸血する時のみ、家に来るわけなのだが……

グレイのためにも、そろそろ暁文にもこっちの家に来てもらった方がいいだろうか？

いや、でも、私もある意味、無理矢理紅丞さんの家に居候している身なわけだし……どうしようかな……一応紅丞さんに頼んでみようかな？

悩みつっ、顔を洗い終え、朝食を作るためにキッチンへと向かった。

「ふあああ……。」

7時半。欠伸をしながら、紅丞さんがリビングに入ってきた。

「あ、紅丞さん。おはようございます。」

「ん……おはよう。相変わらず早起きだな……。」

「紅丞さんが遅いんです。早く準備しないと遅刻しますよ。」

「はいはい……。」

紅丞さんは逃げるように洗面所へと向かった。

「未来ー、腹減ったー。」

紅丞さんが再びリビングへとやって来た。

「出来てますよ。」

テーブルの上には既に朝食を並べておいた。メニューは、洋風っぽく、トーストとポテトサラダにしてみた。

「……それにしても、なんで紅丞さんの家って、リビングとキッチン離れてるんですか？リビングにも水道あるのに。」

食器棚はリビングにあるくせに、コンロなどはキッチンにあるので、私はいつも、リビングから食器を持って行き、キッチンで料理を作り、リビングでその食器を洗い、リビングにある棚に戻す……という風になっている。

「それなー、俺も疑問に思ってたんだよ。でも、親が教えてくれなかった。」

そう言いながら紅丞さんはテーブルの席に座った。

「あ、それと、あの……ちょっとお願いがあるんですけど……。」

「ん？何？」

「暁文の事なんですけど……グレイのためにも、暁文もこの家に住ませてもらうのでしょうか？」

「……暁文かあ……本人には聞いたのか？」

「いえ、まだなんですけど……。」

「ふーん……グレイと暁文がいいって言うのなら、俺は全然オーケーだよ。多分、親もまだあと数年は帰ってこないだろうし。」

「本当ですか？ありがとうございます。」

私も朝食を食べるためにテーブルの席に座る。

「……あ、紅丞さんまた野菜残してる。」

「いや、これぐらい勘弁してくれよ。」

「駄目です。ちゃんと食べてください。」

「ええ〜?」

「嫌なら食べなくてもいいんですよ?」

「……食べる。」

「それでいいんです。」

紅丞さんは多少ふて腐れながらもサラダに箸を伸ばした。

……まったく、高校3年生の癖に野菜嫌いなんて……考えられない。

「む……そういえば、未来。」

「何ですか?」

「未来には、苦手なものとかないのか?」

「苦手なものですか?そーですねぇ……。」

そういえば、私の苦手なものってなんだったつけ?

「……幽霊とかは?」

「お化け屋敷や心霊スポットには余裕で入れます。」

「虫とかは?」

「高校入学したばかりの頃に飛んでるゴキブリを素手で捕まえたことがあります。」

「凄っ、三田さんかよ……え、高いところとかは?」

「通天閣の展望台から街を見下ろしながら”低いなー”って本音をこぼしたら驚かれたことがあります。」

「お前、前世が鳥かなんかだったんじゃないの?……じゃあ、グロテスクなものとかどう?」

「中学校の頃に慣れました。」

「そうか……ふむふむ……。」

「……そんなこと聞いてどうするつもりですか?」

「え?あ、いや、その……な、何でもないよ、忘れてくれ。」

「……まあいいでしょう。どーせ”私の弱点を聞いて反撃しよう”とでも考えてるんでしょう?。」

「うっ……。」

あ、今、目え逸らした。ってことは本当か。

「もーちよつとロクな事考えてくださいよ……受験生なんですから……。」

「わ、解ってるよ……。」

その後、まだ寝ている 그레이 を放って、私と紅丞さんは学校へと向かった。

悪夢

「ところで、未来。」

「何？」

「……いつになったら”未来がパートナーをしている吸血鬼”を紹介してくれるのかなー？」

教室へと向かう廊下で、綾子はそう言った。

……現在、放課後。

部活の勧誘中で、綾子と一緒に1年生の教室を何度も巡回していたのだが、教室に誰かいないかどうかふと気になったので、我々の教室へと向かう途中。

「そうだなあ……まあ、その日がくれば……ね？」

「そう言って、いつもはぐらかしてるじゃん……どーゆーつもりい？」

綾子はぎこちなく私を睨みながらそう言った。

暁文の事は、以前綾子に話したことはあるのだが……なかなか会わせる気になれない。

だって、綾子の性格を考えれば、絶対に”吸血してるところが見たい”って言っに決まってるし、あの無理矢理な吸血を見せるわけにいかないし……。

どうにかして誤魔化すしかない。

「こ、こっちだって予定が合わないのよ……。」

「本当？……私、そろそろ我慢の限界だよ。近々佐川先輩の家に乗り込んでやっても恨まないでよ？」

「え、それは困る……。」

どうしようかな…と悩んでるうちに、教室の前にたどり着いた。

綾子が扉を開けようと手を伸ばした　その時。

ドン！！！！

まるで大きな何かを壁にぶつけたかのような、そんな音が教室内部から響いた。
その音に、綾子の手が止まった。

「な……何？今の。」
引きつった表情でこちらへ振り返る綾子。
その瞬間

ガラッ！！

今度は勢いよく扉が開いた。

そこにいたのは

赤い目をした

吸血鬼だった。

事件

「!？」

綾子が怯んだ瞬間、吸血鬼は腕で綾子の首を軽く絞め、懷からナイフを取り出し、綾子へと向けた。

まるであの時の、 그레이がレミに捕まったあの時を思い出させるような光景だった。

「綾子っ!!」

綾子は怯えきつた表情をしている。

「入れ。」

吸血鬼は私を真っ直ぐ見ながらそう言った。

私はゆっくりと教室の中へ足を踏み入れた。

中をみて、私は驚愕した。

机や椅子は全て教室の後ろの隅に追いやられ、代わりに黒板の前には、数人の生徒が座っていたのだ。

しかも、その7割が 私と綾子のクラスメイトだった。

2年へと進級するときに、”1年の頃とクラスは変動しない”と聞いたので、大体みんなの顔と名前は覚えている。

……でも、何故吸血鬼はこんなことを？

「きゃあっ。」

綾子と私は、吸血鬼に突き飛ばされるように、その人ごみの中へ押し込まれた。

「……さて、そろそろメンバーもそろったことだし。」
そう言うと、吸血鬼は突如、私の腕を掴み、人ごみの中から引っ張り上げた。

そして

持っていたナイフで、私の腕を 切り裂いた。

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

朝と昼、暁文に吸血されていないせいで、私の身体には今、血が通常以上に溜まっている。

その血が、腕の傷から容赦なく噴き出す。

「きゃああつ!!」

1人の女子生徒が、悲鳴を上げた。

吸血鬼は私を、見下すような目で見ている。

意味が解らない。

「あんだ…何がしたいの!？」

「何がって、解らないの?…手紙まで出したのに?」
「手紙って……。」

思い出した。

昨日の、あの手紙。

目の前にいる、こいつが、その送り主……。

絶望って、一体どういう？

「いやあ、それにしても、来るタイミング間違えたかなあ。もう少し早く来れば、たくさんの人間を傷つけることができたはずなのになあー。」

吸血鬼は笑いながら答えた。

傷つけるって……そんなこと……。

「…ふざけんなっ……。」

「ん？」

「ふざけたこと言ってんじゃねえ！！！！俺以外のっ……俺の友人を傷つけるんなら容赦しねえぞ！！！！」

叫んでから、気付いた。

遅すぎたんだ、気付くのが。

性別が変わってる。

しかも、クラスのみんなの前で。

恐れていたことが、現実になった。

「ぶつ、あはははははは！！！」

瞬間、吸血鬼は狂ったように笑い出した。

「こいつ、いきなり男になった……あはははははは！……！」

俺を指さしながら、腹を抱えて笑っている。

ようやく、言葉の意味が分かった。

絶望 それは、俺の性別が、クラスメイトにばれること。

奴の狙いは、それだったんだ。

「あー…おつかしい。本当に馬鹿だなあー最近の人間は…怒るとすぐ周りが見えなくなる。だから面白いんだよなー。」

そして

「……私の名前はメイズ。これでも一端の吸血鬼だ。…それじゃ、安藤未来さん、また会える日まで!」

そう言うのと、その場で小さくジャンプし、姿を消してしまった。

終わった。

何もかも、
終わった。

気が付けば、俺は走り出していた。

教室を出て、ひたすら廊下を走った。

その後、どうやって家まで帰ったのか

よく覚えていない。

絶望

日比野から、”未来の性別が、周りのクラスメイトにバレた”ことを詳しく伝えられた。

性別が周りにバレる　未来が、1番恐れていたことだ。

なるほど……だから、いつまで待っても未来が戻ってこないわけだ。鞆を置いたまま帰るなんておかしいと思ったし。

「佐川先輩、今は早く帰ってあげて下さい。未来、多分家に帰つてると思いますので……。」

真面目な表情をした日比野からそう言われ、俺は自分の鞆と、未来の鞆を持ち、ダッシュで家に帰った。

「はあ……はあ……。」

家に帰り、扉を開ける。　玄関を見ると、未来の靴があった。

鞆を持ったまま、2階にある未来の部屋へと向かう。

部屋の前には、 그레이 がいた。

「紅丞……。」

그레이 は、部屋に入ることなく、扉の前で茫然と立ち尽くす状態で俺を見ていた。…少し泣きそうな顔をしている。

「 그레이 、何かあったのか？」

「未来ちゃんがいきなり帰ってきて…何かあったのか聞こうとしたんだけど、何も言わずに部屋に入っちゃって……鍵も書けちゃったみたいで、僕、どうすればいいのか……。」

グレイの言葉を聞き、ドアノブを回す。だが、やはり鍵がかかっていた。

俺は咄嗟に財布から10円玉を取り出した。 こういので開くタイプの鍵でよかった。

10円玉を器用に使い、ゆっくりと鍵を開ける。

「……グレイはここにいろ。」

小さく呟き、音を立てない様に部屋に入った。

未来は、部屋にあるベッドの上で膝を抱えてうずくまっていた。ジャージの袖が、まるで刃物で切り裂かれたようになっていた。

「……未来。」

小さく呼びかけると、未来は涙で濡れた顔で俺を見上げた。

「……紅丞さんっ……。」

未来は俺の顔を見るなり、抱き着いてきた。

「!?!?…ちよっ、未来?」

いきなり抱き着かれ、怯む俺。でも、未来は

「っ……うっっ……うわああああっ。」「
泣いていた。未来は、俺にしがみ付きながら、泣いていた。

「未来……。」
無意識のうちに、俺も、未来を抱きしめていた。
。

慰め

……こういうとき、俺はどうすればいいのだろうか。
黙ってそばにいるべきか、それとも1人にするべきか……。

考える必要もない。明らかに前者だ。

未来がようやく少し落ち着いてきた時、俺はとりあえず着替えようと部屋を出ようとした。

だが、ベッドから立ち上がった直後、未来が俺の制服の端を掴み、こう言ったのだ。

「あのっ……まだ、ここにいてくださいっ……。」

驚いた。

正義感が強くて、俺よりも大人なあの未来が、1人になることを拒絶したのだ。

当たり前だ。未来だって、人間なのだから。

俺は少し、未来を買い被っていたのかもしれない。

俺はまだすすり泣いている未来の横に座りなおした。

「紅丞さん……私、性別の事……みんなに知られちゃって……。」
未来はしゃっくり交じりでそう言った。

「……いいよ、日比野から聞いた。話さなくていい。」

「でも……。」

「日比野から聞いた情報だけで充分。後は聞こうとしないし、聞くとも思わないから。」

「……わかりました……。」

そう言くと、未来はいきなり俺の肩に身を寄せた。

「あの……紅丞さん、しばらくこうしててもいいですか……？」

「え、あつ……ああ、かまわないよ。」

ヤバイ、今、俺の顔、多分物凄く赤くなってると思う。

「紅丞さん……。」

未来が眠そうな、ぼんやりとした声で話しかけてきた。

「ん？」

「私、明日から、どうすればいいんでしょう……？」

そうだ。問題はこれからの事だ。

日比野の話によると、教室にいた生徒は約40名、そのうち7割が未来のクラスメイト、その他3割の中には、3年生もいたらしい。

……もう今頃、学校中にそのことが知れ渡っていても不思議じゃない。

「そうだなあ……あ、そうだ。」

ちよつといいこと思いついた。

「……未来、明日は学校休め。」

「えっ……？」

「俺が明日学校へ行く。そんなもって、日比野から、その後どうなったのか聞いてくるから、それから考えよう。」

悪く言えば、結論を先延ばしにすることになるが、やらないよりはマシだろう。

「紅丞さん……」たまには”いいこと思いつくんですね……”。

「たまには”って……毒舌は健在かよ。」

「ふふっ……でも、そうですね……じゃあ、明日はよろしくお願いします……。」

そう言つと、未来は目を閉じ、眠ってしまった。泣き疲れたらしい。

その瞬間

キィーーン……

酷い耳鳴り。…聴覚がパワーアップする。

「っ……！」

聴覚がパワーアップした瞬間、いきなり轟音が聞こえたりすることがあるから、思わず身構えてしまった。すると

トクン、トクン　という、少し小さめの音が聞こえた。

これって……ああ、未来の心臓の音か。そりゃあこんなに近くにいらんだもん……聞こえるわけだ。

もちろん、それだけじゃなく、スウスウという寝息もハッキリと聞こえる。

……って、これに聞き入ってる俺って物凄く変人じゃないか……しっかりしろ、俺。

俺はとりあえず未来を起こさないようにゆっくりとベッドに寝かせ、音を立てないように慎重に部屋を出た。

部屋の前には、 그레이がいた。どうやら出てくるまで待ってたようだ。

「あつ、紅丞。…未来ちゃん、どうしたの？」

「ん、ちよつとな。気にすんな。」

「何で？気になるよ。」

「いいから。…とりあえず、今はそつとしておけ。」

「……解った。ところで、紅丞。」

「ん？」

「お腹空いたよ。」

「ああ、そういえば、朝も昼も吸血してなかったな……。」

「そつだよ。まったく……どうして僕を起こさずに学校に行っちゃうかなあ。」

やっぱり、少し怒っているようだった。…瞳が黒い。

「悪かったって……でも、起きなかった 그레이も悪いんじゃないか？」

「そ、そうだけど……。」

「…ま、いいか。ほら。」

俺はその場にしゃがみ、 그레이に視線を合わせる。

「そんじゃ、今日はいっぱい吸血しないとね。」

그레이は俺に抱き着くようにしがみ付き、勢いよく歯を刺した。

「いってえ……そんな強く刺さなくなっただいいだろ……。」

「ん……ごめんごめん。」

軽く謝り、すぐさま吸血した。

数分後、グレイは俺から離れた。

「ふう。……紅丞、大丈夫？」

「いや……大丈夫じゃない……」

グレイは身体が小さいから、吸うときに時間がかかってしまう。

しかも、今回は朝と昼、および夜の分も血をあげたから、かなり時間がかってしまった。

「……なんか、身体中痛い……」

「えっ……ごめん、じゃあすぐに部屋に……」

俺はグレイの手を借りつつ、部屋へと向かった。

別の・・・（前書き）

そんなつもり更々ないのになんかB Lっぽくなっちゃいました。
確かに作者はB L好きだけどそんなつもりr y

別の・・・

聴覚も元に戻り、少し時間が経った頃

大変なことになった。

未来はまださっきのような状態のままだから、1人にしておいた方がいいのだが

「……じゃあ、俺はどうすればいいんですか？」

暁文がいたことを忘れていた。

しかも、暁文はグレイ同様、朝も昼も吸血していない。もうすぐ夜になりそうだし……一体どうすれば……

「と、とりあえず、未来が普通の状態に戻るまで待つ、ってことに……。」

「……紅丞さん、それ、本気で言ってるんですか？」

暁文が俺を睨みながらそう言った。グレイ？グレイなら俺の後ろであわあわしてるよ。

「でもさ、暁文、未来は今ああいう状態なんだ。もう少し待ってもらわなきゃ困る。……お前だってわかるだろ？」

「そうですけど……。」

「それでも血が欲しいんなら、俺から吸血するか？」

「え？」

暁文が、少し驚いた表情を見せた。

「……でも、俺、未来と契約してるから、未来の血しか飲めないですし……。」

「それはあくまで権利剥奪前の話だろ？……今は別なはずだ。違つか？」

「そうですけど……。」

暁文はまだ口ごもっているようだった。

「ちょ、ちょっと待って、紅丞。」

後ろから 그레이が声をかけてきた。

「なんだよ、 그레이。」

「いや、その……アカツキは、結構グルメなんだ。だから、未来ちゃん
の血じゃないと満足できないんだよ。」

え、そうなのか……。

「……じゃあ、やっぱり我慢してもらうしか……。」

「……いや、紅丞さんがいって言うんなら、紅丞さんの血も飲み
ますけど……。」

その言葉に、 그레이が反応した。

「え？……いいの？アカツキ。」

「ああ。紅丞さんも、 그레이の血を飲んだことがあるんだろ？」

「そうだけど……。」

言葉を濁す 그레이。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。」

今度は俺が間に入った。

「何？紅丞。」

「その……俺は確かに 그레이の血を飲んだことあるけど、それがど
うかしたのか？」

「えっと……紅丞には話してなかったんだけど……吸血鬼の血を飲ん
だことがある人間は、体内の血が甘くなるんだ。」

……なんでかは僕もわからないんだけどね。で、アカツキはそれが好
きなんだよ。そうだよ、アカツキ？」

그레이の言葉に、 暁文は頷いた。

「てことは、 暁文は、俺の血でも充分飲める……ってことか？」

「そうなりますね。」

暁文はそう言うと、俺に近付いてきた。

「そうとわかれば話は別です。……今、いいですか？」

「ああ、解った……グレイ、後ろ向いてろ。」

「え？なんで？」

「何でって……察しろよ。」

暁文はいつも未来に抱き着くように吸血している。そうともなれば

……解るだろ？

「？…解った。」

グレイは”？”を浮かべながら後ろを向いた。

「……じゃ、失礼します。」

暁文は俺に抱き着き、噛み痕に歯を突き刺した。

グレイよりも歯が長い所為か、めちゃくちゃ痛い。

暁文はそのまま歯を抜き、吸いついた。

「うつ……！？」

何だっ……これ！？

グレイとは全然違 いや、そりゃ、そもそも身体の大きさが違うから、全然違うのは当たり前なんだが……。

暁文は、まるで俺の身体から血を絞り出すかのように、抱く力を強くし、且つ、尋常じゃないスピードで血を吸い上げている。

吸い上げる度^{たび}に心臓が半端ない速度で鼓動を繰り返しているの^がわかる。

……っていうか、未来は、いつもこれに耐えて来た…って事だよな？

「はあ…はあ……。」

息をするのも辛^{つら}くなり、暁文の服にしがみ付く。

苦しい。

ただ純粹に、そう思った。

瞬間、暁文が俺を離れた。

「あつ……。」

支えが無くなり、俺はその場に倒れる。

その音に、さすがのグレイも振り向いた。

「!?!?……紅丞!!」

グレイは慌てて俺に駆け寄る。

「紅丞さん！大丈夫ですか!?!」

暁文も慌てて俺に近寄る。

「……あ、暁文……お前、いつもあなのか……?」

「え……そうですね……。」

あれがいつも通りなのか……だったらやっぱり、安藤未来はただ者じゃないな。

「紅丞、大丈夫?」

「大丈夫じゃない……悪いけど、俺を部屋まで運んでくれないか……?」

そう言った瞬間、暁文がいつも未来にやっていたように、俺を”お姫様抱っこ”で運び出した。

……いや、男なのにお姫様抱っこってなあ……恥ずかしすぎるだろ。

暁文は俺を抱えたまま、器用に扉を開け、俺を部屋へと運んだ。

「よいしょつ、と……。」

暁文はゆっくりと俺をベッドに降ろした。

「ありがとな、暁文……。」

「いえ、俺の方こそ、ちよつと無理させちゃってすいませんでした。」

……それでは、失礼します。」

暁文は軽く会釈すると、部屋を出て行った。

。

訪問（前書き）

ちよつと紅丞と未来だけで引つ張りすぎてゐる感じがするんで、
ちやと次行つちやいます。

訪問

翌日の朝。

私は、クラスメイトの1人を連れて、ある家の前に来ていた。

……佐川紅丞の家。そして、安藤未来が住んでいる場所。

今や、未来が佐川先輩の家に居候していることを知るのは、私と、私が連れてきたクラスメイトぐらいだろうな。と思う。

「…行くよ。」

「え、本当に行くんですか？」

「当たり前じゃん。そのためにわざわざここまで来たんだから。」

「でも……安藤さん、断ってくるかも……。」

「そりゃあ断ってくるに決まってるじゃん。でも、そこを説得するのが私たちの役目なの。……さ、行くよ、夏子！」

私は夏子と共に、勢いよくインターフォンを鳴らした。

訪問 その2

ピンポン

朝、紅丞さんが学校へ行った後、家のチャイムが鳴った。

俺は、ちょうどさっき、暁文に血を与えて性別が変わり、男になった状態で出た。

扉を開けると、そこにいたのは

綾子。

そして、1人の女子が、綾子の隣に立っていた。

「……………は？」

俺は変な声をあげてしまった。

「未来、おはよう!!」

綾子は右手を挙げて挨拶した。

「え、あ、いや……………おはよう……………」

意味が解らなかった。

…なんで、綾子がここに？……いや、それならまだしも、隣にいる女子は誰だ？

「……っていうか、綾子、何の用だよ？今日学校だろ？」

「うん、そつだよ。だから未来も、学校行こうよ！」

……なるほど、さすがは綾子。俺が休むと思ってきたらしい。いや、間違っではないんだけどな。

「嫌だ。」

俺がそう言つと、綾子は少し大きめのボストンバックを俺に差し出した。

「…何、これ。」

「何って、男子用の制服。」

「……は？」

「だーかーら！！学校行こうよって言つてんの！！」

「……ふざけんな。綾子も見てただろ？昨日の様子……俺、行かないから。綾子たちも早く学校行けよ、遅刻したくなけりゃな。」

綾子を軽く睨み、扉を閉めようとした　　が、

「ふざけてんのはあんたの方でしょ！！」

綾子がそう叫びながら扉に手を挟んできた。

「っ……何だよ、いい加減にしてくれ！！大体俺のどこがふざけてるって言うんだよ……！！」

再び扉を開け、綾子に向けて怒鳴った。

「あんたの今やろうとしてることがふざけてるって言いたいのよ！
」

綾子は怒鳴りながら俺の胸倉を掴んできた。

「……大体さあ、他人には平気で説教かましてる癖に、自分の事となれば別って、おかしくない！？変だと思わない！！？」

「それは……普段の奴とは格が違うんだよ！！俺の性別が、みんなに知られて……もう、俺……」

最後の方は声が小さくなり、俯いてしまった。

綾子は俺から1度手を離し、代わりに俺の肩に手を載せた。

「未来、そのままでいいから聞いて。未来さあ、私に性別の事がバレた時、何て言った？

「……あなたは確か、」お願いだから、このことは誰にも言わずに、内緒にしてほしい」って言ったよね？

で、私は、それを今まで誰にも言わず内緒にしてきた……これ、何を意味するか分かる？」

「……わからない。」

「私はこの町出身、でも未来は違う。……で、私は未来の性別の事を受け入れた。

「……ちよつと的外れな言い方になるかもしれないんだけど、私たちのクラスメイトはみんな、この町の出身だから、未来の性別を受け入れてくれると思うの。」

だって、私も、受け入れることができたんだし……違う？」

「それは……確かに的外れな言い方だな。」

「うつ…そこはいいでしょ…だから、ね？…この町の人たち、信用してみようよ？」

「でも……。」

「…もう、そんな狼狽えちゃって…未来らしくない！！何かあったら私が守ってあげるから！！！」

「綾子……。」

「ヤバイ、ちよつと泣きそう。」

「解った。俺、綾子を信じる。…でも、その前に2つ、訊いてもいいか？」

「何？」

「男のままじゃないとだめか？」

「いや、女の方でもいいけど…なれるの？女に。」

…いや、これ、男でも女でも変わらないかも知れない。

「…じゃあ、男のままでもいいや。せつかく制服も買ってくれたみたいだし。」

「うん。制服、結構高かったんだよ？」

「それは、悪かったな……じゃ、もう1つ。」

「何？」

「その…そいつ、誰だ？」

俺は綾子の隣に立っている女子に目を向けた。

「誰って……1年の時も同じクラスだったんだよ？」

「そうだったけ？…なんか、顔は見たことあるんだけど…。」

「もー、未来い、冗談キツイよ？1年の時も同じクラスだった夏子を忘れちゃうなんて。」

ん？夏子？……どこかで聞いたことあるような　あ。

「夏子って、もしかして…。」

俺は確かめるように、女子の方を見る。

女子はゆっくりと俺に近付き、小声で

「…あの、アルトから、何か聞いてませんか？」
そう言った。

そうだ、思い出した。アルトのパートナーの

「忘れていたようなので、自己紹介させていただきます……えっと、赤崎夏子と申します。よろしくおねがいします。」

女子　夏子は、笑顔で自己紹介した後、深々とお礼をした。

「あ、ああ……よろしく。」

俺はぎこちなく挨拶をした。

「ねっ、未来。凄いでしょ？この子、めちゃくちゃ礼儀正しいんだよ？」

「いや、まあ……綾子とは正反対だなーと思った。」

「え、何それ。私礼儀正しくないみたいじゃん。」

「いや、礼儀正しくないだろ、綾子は。」

「えー！？何それ酷い！！」

俺は「はいはい……。」と生返事を返しながらボストンバックを受け取った。

「着替えたら呼んでねー。」

「はい……。」

俺は、綾子と夏子をその場に残し、扉を閉めた。

……綾子は、俺の事を心配してわざわざここまで来てくれたんだ……俺はそれに、応えないといけないんだ。

俺はとりあえず自分の部屋へと戻り、男子用の制服に着替えた。

予想外

『おお〜〜!』

教室に入った瞬間、俺は周りの生徒の歓声に包まれた。

「…………え？」

「安藤!! お前やつぱり学校来たんだな!!」

複数の男子が俺に近付き、そう言った。

「え、あ、ああ…………。」

思わず拍子抜け。中学の時とは全然反応が違う。

俺の反応を後目に、周りの奴らは口々に『やつぱ安藤は男の方がかっこいいな』とか、『ほら、女よりも男の方が子供っぽいだろ?』

とか(余計なお世話だ。)言っている。

俺は一度、綾子に、”中学時代に性別がバレた時の事”を離れたところがある。

そのころの話は、さすがに自分でも忘れてしまったのだが、クラスメイトの反応は、それとは全然違う反応だった。

これは……皆、俺の性別を受け入れてくれてる…というべきなのだろうか？

まだ、少し信用できない。今日一日で様子を見ないと無理かもしれない。

とりあえず、自分の席に座る。

「……………」

時間がとても長く感じる。早くホームルームになってほしい。

そう思った瞬間

「安藤！！」

クラスの、比較的チャライ男子、須藤が話しかけてきた。 思わず、ビクツと身体が竦んでしまう。

「え、な…何？」

怖がる表情が、表に出てしまった。

「…なんか、違うなあ。」

須藤がそう呟いた。

「……………え？」

「いや、だから、普段の安藤と違うって言いたいんだよ。…なんていうか、女の時はもっと強気だったはずだろ？」

「そ、それは……………」

「もっと堂々としてろよ。俺たちは別に、その性別の事、嫌だとは思ってないからさ。」

「え……………本当か？」

「ああ。逆に、なんか、男友達ができたみたいで、少し嬉しいよ。」

須藤は確かにチャライが、嘘はつけないタイプだ。…てことは、本当か。

「……………ね？言っただしょ？」

隣の席の綾子が横から声をかけてきた。

……………確かに、このクラスの人たちは、俺の中学時代のクラスメイトとは違うようだった。

「……………なんか、ありがとな。」

「いいっていいって！！気にすんなっ！……………それよりも……………」
須藤が少し恥ずかしそうに切り出した。

「……………数学のノート貸してくんない？……………昨日、書き忘れちゃって。」

「ったく……………いつも授業中寝てるからだろ？ほら。」

俺は素直に数学のノートを差し出した。

「ありがとな、安藤！ホームルームが終わる頃に返すから！」

そう言いながら、須藤は自分の席に戻って行った。

予想外（後書き）

すんません。なんか、正月なもんで、夜更かししまくってたら寝不足が原因でこんな出来になりました。どこをどう修正したらいいのかわからなくなってきたwww

とりあえず、今後ちゃんと修正できるように、早寝早起き（多分無理だけど）を心がけ、宿題も（答えを見ながら）ちょこちょこやって、雪かきも（嫌々）しつつ頑張りたいと思います。

帰路

「綾子……。」

「ん？何？」

「なんか、今日、ありがとな。」

「へっ？……な、何言ってるの！！今日は私のおかげじゃなくて、あの……頑張ったのは未来じゃん！」

綾子を見ると、顔を真っ赤にしてあわあわしている。

「……そりゃあ、確かに俺、綾子にそんなお礼の言葉述べたことないのかもしれないけどさ……普通そんな慌てるか？」

現在、地下鉄構内。綾子を家までおくるために2人、帰路についていた。

「い、いやあ、普段お礼言わない人からお礼言われるとちょっとあわあわするもんだよ？」

「ふーん……ところでさ、綾子。」

「何っ？」

「夏子の事なんだけど……。」

「ん、夏子がどうかしたの？」

「いや、その……いつ、仲良くなっただ？」

「えっとね、昨日の放課後、すぐ。」

「すぐって……俺が教室出た後？」

「そう。」

「……どういう風に？」

「そこは企業秘密。」

何で企業秘密なんだ。

「でさ、未来。」

「ん？」

「昨日の吸血鬼の事なんだけど…あれ、未来の知り合い？」

「まさか…あんな奴初めて見た。」

「そうなの？……じゃあなんで未来を襲ったりしたのかな？」

「さあな…吸血鬼の考えることはわけ解らないからな。」

暁文もそうだし。

「…吸血鬼と言えば、未来。」

「今度はなんだ？」

「その……未来がパートナーをしている吸血鬼はいつ出てくるわけ？」

「ま、またその話が…だから、その日が来れば、な？」

「えー？」

「ったく……グレイを見ることができただけでいいと思ってくれ。」

「だって、グレイちゃんは佐川先輩のパートナーなんでしょ？私が見たいのは未来がパートナーしてる吸血鬼だよ。」

「でもなあ……。」

紅丞さんで思い出したのだが、念のために言っておくと、今朝、学校を出る前に紅丞さんに”やっぱり学校に行くことになった”と連絡を入れたら

「無理しないで、何かあったらすぐ言えよ？あ、それと、無理だったら部活は来なくていいから。」

と言ってくれたおかげで、少し楽に登校することができた。……学校では会えなかったから言えなかったけど、帰ったらちゃんとお礼言っておかなきゃな…ちなみに、部活は休んだ。

「もー今日は我慢ならんよー。家までついていく。」

「え、ここから？…道戻ることになるけどいいのか？」

「構わない！！もうこうなりやついていくよ！！」

一応、綾子の中では、暁文も紅丞さんの家にいるということになっているらしい。……本当はマンシヨンの方の家にいるんだけどな。

「はあ……悪いけど、無理。会わせることはできない。」

「え、なんで？」

「だって、相手は吸血鬼なんだぞ？お前絶対”吸血するところが見たい”とか言うに決まってるんだろ。」

「？…そんなこと言わないよ？」

「え？」

「私はただ、”未来がパートナーをしている吸血鬼が見たい”ってだけで、”吸血するところが見たい”なんて思わないよ。」

それに、吸血シーンってさ……結構エグイイメージあるし…それなら見たくないし。」

なんと、綾子の口からそんな言葉が出るとは……いつもの好奇心旺盛な綾子はどこ行っただ？

ちよつと、綾子の事を誤解していたかもしれない。

「と、言うわけで、未来。いいでしょ？」

「まあそれならいいけど……でも、もう少しだけ待ってくれないか？」

「えー？なんでー？」

「今その吸血鬼、マンションの方の俺の家にいるんだけどさ、近々紅丞先輩の家に移住するかもしれないんだ。そういうのが終わったらにしてほしくて。」

「ふーん……じゃあ仕方ないか。」

「ああ、悪いな。」

「大丈夫！…それじゃ、私この辺で！」

「おう、また明日。」

「また明日ー！」

綾子は元気に地下鉄構内を走って行った。

移住

「……っていうわけなんだけど……どう、思う？」

現在、マンションの方の自宅。

とりあえず暁文に移住の話を直接しようと思い、綾子と別れたすぐ後、紅丞さんの家には帰らずまっすぐマンションに行った。

ゆっくり話をしようと思ったたらいきなり取り押さえられて服を無理矢理脱がされ（念のために言っておくと、ブレザーだけ）、抱きしめられた拳句吸血されたので、仕方なく吸血されながら話を進めることにした。

「ん……そうだな……。」

暁文は私を抱きしめたまま悩んでいるようだった。

「確かに、いちいち外に出るのも面倒だったし、グレイと一緒にいられるんならその方がいいけど……紅丞さんに了承は得たのか？」

「それは大丈夫。今朝OKもらったから。……っていうか、離してくれない？」

「あ、ごめん。」

暁文から解放された私は、すぐ寝室へと向かった。

さすがに男子の制服で家まで帰るわけにはいかない。……こういう時のために、外行き用の服を何着か残しておいて正解だった。

着替え終え、寝室から出ると、暁文が少々困ったような顔でソファに腰かけていた。

「暁文？　どうかした？」

「いや……俺が移住したら、この部屋どうするんだ？」

「あー…そこら辺は大丈夫。」

以前、私が紅丞さんの家に行く時に、いちいち帰ってくる必要の無い様に、冷蔵庫の中は空^{カラ}にして、電化製品も一応必要最低限のもの以外はコンセントは抜いてある。

……ので、暁文が移住しても、たいして変化はない。

「でも、もしかしたら親が帰ってくるかもしれないから、一応部屋は売り払わないでおく。」

「ふーん……それならいいか。俺、今すぐ移住できるけど、いいか？」

「あ、大丈夫。それじゃ、行こっか。」

私はブレザーを鞆に突っ込み、暁文はコートを着て家を出た。

t a l k

「……そういえば、未来。」

「何？」

「さつき血を吸った時に思ったんだが……お前、他の吸血鬼と契約したのか？」

「え？」

その言葉に、つい、足が止まってしまった。

「……未来？どうした？」

暁文も立ち止まり、こちらを向く。

「え、あ、いや、その……なんで解ったの？」

「なんでって……詳しい部分は省くけど、吸血鬼の唾液には血を増やす作用がある……って言ったよな？」

で、さつき血を吸った時に、なんとなく量が多い気がしたんだ。…

昨日吸ってないってのもあるけどな。」

「あ、確かに昨日、吸血してない……じゃあ暁文は昨日1日何も口にしなかったってこと？」

「いや、紅丞さんから吸血した。」

「え！？」

で、ことは……昨日紅丞さんは、暁文の吸血を身をもって体験した

……ってことになるよね？

……帰ったらとりあえず謝っておかなくちゃ…。

「…で？未来。誰と契約したんだ？俺の知らない所で契約するなんてあんまりじゃないのか？」

「別に、誰と契約しようが私の勝手でしょ？」

「そう言うわけにはいかないんだよ。」

「……どうして？」

「さつき、吸血鬼の唾液には血を増やす作用があるって言ったよな？
以前その話をした時に、未来は”血を吸わせてそのまま放置したら、
身体中の血が増えまくって大変なことに……”ってのは有るのか？」
って訊いたよな？」

「あ……うん、血が増える上限とかあるのかなーとか思ってた……」
……っていうか、男の時の私の物真似上手いな……こいつ。

「その時は解らなかつたんだけど、俺も気になったから、一昨日、
アルトとメルのところに行って訊いてきたんだ。」

「そうだったの？」

「ああ。……で、その結果 血が増える上限は無いらしい。」

「上限は、無い？……てことは」

「血が増えまくって大変な事に、は有り得る、ってことだ。」

そう言っていると、暁文は立ち止り、私の肩を掴んで自分と対面させた。

「つまり、未来は既に俺とグレイ、2人と契約している。……そんな
状態で3人目の吸血鬼と契約したらどうなるか、解るよな？」

暁文は、物凄く真剣な目で私を見つめていた。

怖い。

暁文はただ、教えてもらったことを話しているだけ。なのに、物凄
く怖い。

「……ごめんなさい。黙ってて、ごめんなさい……。」

俯き、まるで瀬夏のような泣きそうな声で、私は必死に謝罪の言葉
を述べた。

……だが、返って来た言葉は驚くべきものだった。

「え、何で謝るんだ？俺、むしろ嬉しいと思ってるぞ？」

……………は？

「…なんで嬉しいの？」

顔をあげ、暁文に問う。

「…………だって、血が増えるってことは、血を飲める量が増えるって事だろ？」

しかも、たくさん血を飲んでも、未来が貧血で倒れることが無い、って事だろ？…いいじゃないか、それだったら。」

「え、あ、いや…………見方を変えればそうなるけど……………もういいや。」

「

暁文の手を振りほどき、歩き出す。

「…未来？怒ってんのか？」

後ろから暁文が追いかけているが訊いてきた。

「別に、怒ってなんかない。」

目を合わせず答える。

「何怒ってんだよー、俺なんかまずいこと言ったか？」

「五月蠅い！もうほつといてー！」

「なっ…………怒鳴ることないだろ…………。」

暁文は少し不機嫌になりつつ、私の横についた。

「…………で、答えてくれ、誰と契約したんだ？」

「…アルトと。」

「え、アルトと契約したのか？」

「そうだけど？」

「へえー…あいつが…そりやそうか…」

何やら1人で納得している。

「何1人で納得してんのよ、私にも説明しなさいよ。」

「ん？ああ、アルトはな、結構前から未来の性別に興味を持っていたんだ。」

「私の？……そういえば、”性別人間の性別が変わるところが見たい”…とかなんとか言っていた気がする。」

何度か会話を交わしていると、紅丞さんの家がある付近にたどり着いた。

「……それにしても、何回も往復してるけど、どうして未来の家と紅丞さんの家はこうも遠いんだ？」

「そんなの知らないよ。暁文が地下鉄乗れるようになれば全て丸く収まるのに…。」

「そんなこと言っただって、俺日本円持ってねえよ。吸血鬼の通貨も一昨日使い果たしたし。」

「え、そんなのあるの？」

「ああ。通貨単位の読み方は日本と同じエンんだけど、吸血鬼にしか使えないんだ。…実物があれば見せてやりたいんだが…。」

「…ちなみに、一昨日、どこで、何に使ったの？そのお金。」

「メルのところ、これを買ったために使った。」

そう言いながら暁文は、吸血道具を取り出した。

「え、吸血道具？メルが持ってたの？」

「ああ。吸血道具は、身体的、もしくは精神的にハンデを持った吸血鬼へ、王から支給されるものなんだ。

で、一昨日、メルが、”もうパートナーがいるから、出来ることな

ら買ってほしい”って言われてな……まあこの世界じゃ吸血鬼の金なんて使えないから、有り金全部と交換したんだ。」

「……大丈夫なの？そんなことして……また使うかもしれないのに。」

「大丈夫。どーせ吸血鬼界でも、血を買う時ぐらいにしか使わなかったし。それに」

今は、未来がいるからな。」

暁文は、私を見下ろし、微笑みながらそう言った。

「……あんたはいつも強欲なんだね。」

少し呆れてしまった。

その時。

「未来くーん!!!」

聞きなれた声が、後ろから聞こえた。

興味

後ろから聞こえた声に、俺と未来は振り向いた。

そこにいたのは。

以前、未来の家に来た友人、日比野綾子だった。

「あ、綾子!？」

未来がすごく驚いている。

「ご、ごめん、暁文、ちょっと待ってて!」

小声で俺に声をかけると、未来はさっさと綾子の方へ走って行ってしまった。

……遠くの方で何か話している。

やーっぱり、あの綾子って女からは妙な気配がする。

なんというか……吸血鬼や天使とは違う、何か別の……”巨大な力みたいな何か”があんな女にはあるような気がする。

初対面の時は何事もなく、ただ、変な気配がするとだけ思ったのだが、今は違う。

気配の力が強まっている気がする。

なんとなく、近寄りたくない。

「暁文ー！ちょっと来てー！！」
遠くで未来が手を振っている。
仕方なく近寄る。

「あ、綾子…紹介するね？…朝比奈暁文、私がパートナーをやっている吸血鬼だよ。」

未来はぎこちなく、綾子に俺を紹介した。

「暁文君で、まさかあの…？」

「そう、以前、綾子もあったことあると思うよ？…あの時は姿が違ってたけど。」

確かに、初めて綾子に会った時、俺は子供の姿だった。

「てことは…同一人物！？」

「うん…そういうこと…。」

未来は綾子に、”吸血鬼は年齢を変えられることができる”事を説明した。

「へえー！！凄いやん！！」

綾子は目を輝かせながら俺を見ている。

正直、あんまり得意

とするタイプじゃないな…。

「…それにしても、吸血鬼ってやっぱり目が赤いんだね… 그레이ちゃんの時は天使だから赤いのかと思ってたけど…。」

え、今、なんて？

「あ、天使は普通は瞳の色は黒なんだよ。」

未来が慌てて補足している。

「未来、ちょっと待て。」

俺は素早く止めに入った。

「何？」

「 그레이に、会わせたのか？」

「会わせたっていうか…偶然会っちゃったんだよ。そうだよな？綾子。」

「うん。」

……なるほどなあ…。てことは、 그레이は俺に”綾子と会っていたことを話してない”…というわけかあ…。これ、どう落とし前つけてくれるんだろうな。あの天使。

「……解った。未来、俺、先に紅丞さんの家に行ってるから。」
俺は踵を返して歩き出した。

「あ、待って、私も！…じゃあ綾子、また明日ね。」

「うん、また明日。」

後ろからそんな会話が聞こえ、未来が俺の横につく。

「暁文、どうかしたの？いきなり…。」

「なんでもない。ちよつと急ぎたくなっただけだ。」

歩く速度を速め、俺たちはさっさと紅丞さんの家に向かった

。

デコピン

「紅丞さーん、ただいま帰りましたー。」

時間にして、6時前後。ちよつと夕方気味な時間。

私と暁文は紅丞さんの家にたどり着いた。

「お、来たか。」

「紅丞さん、今日からよろしくお願いします。」

暁文が律儀に礼をする。

「アカツキー。」

少し待って、 그레이가2階から降りてきた。

途端に、暁文の

目の色が変わった。

그레이가暁文に飛びつこうと、暁文の前に立った、その瞬間

バシッ

とても音がしそつなくらいの勢いで、暁文が 그레이に、めちやくちや痛そつなデコピンをかました。

「ひゃんっ!!」

그레이は変な声を出しながら尻餅をついた。

「なっ……何!?」

「何じゃねえよ。綾子の事黙ってたな?」

「そ、それは、その」

グレイが何かを言おうとしているが、暁文はそれを遮るように紅丞さんを見た。

「紅丞さん、俺、ちょっとその辺散歩してきますんで、部屋の準備とかよろしくお願いします。」

そう言つと、さつさと家を出て行ってしまった。

「あ、嫌つ、待って、アカツキー!!」

グレイは半泣き状態で家を飛び出した。

「……はあ……」

ため息　しか出ないな……

「な、何かあつたのか？」

「……ここに来る前に、綾子に会つたんです。」

「日比野に？」

「はい。……以前、グレイは綾子に会つたことがあるんですけど、そのことを暁文に話してなかったみたいで……それで。」

「え、暁文はそれだけでああなるのか？」

「なんと言いますか……本当にグレイの事が好きみたいで、隠し事をされるのが嫌みたいなんです。」

カラスの時もそうだったし。

「へえ……そうなのか。」

「そうなんですよ……本人の束縛癖が強くないうちに何とかしなくちゃいけないんですけどね……」

「それもそうだな。じゃ、戻ってくる前に部屋の準備しておくか。」

……未来、手伝ってくれるか？」

「もちろん。」

私は紅丞さんの手伝いをするため、2階へ移動した。

デコピン（後書き）

束縛しているところを見るのは嫌いじゃないです。

言い訳

アカツキの後を追って家を飛び出したはいいものの、何を言おうか……。

「あ、アカツキ、ちょっと待って!!」

早歩きで僕の前を歩くアカツキに何とか追いつき、コートの裾を掴んで引き留める。

「なんだよ？」

アカツキが振り返り、軽く睨むように僕を見下ろす。その目に、思わず身体が竦んでしまう。

「いや、あの、その……。」

「……用がないなら離してくれ。」

「……。」

ぶんぶんと首を振って拒否する。

「違うの……綾子ちゃんの話は、その……未来ちゃんが話すと思ったの……。」

「……そうなのか？」

その言葉に、しっかりと頷く。

「だから、誤解なの……。」

途端に、僕の目から涙が零れた。

「っ……。」

隠すために、俯く。

「……はあ……お前は泣いてばっかだな……。」

アカツキが呆れたように呟く。

「……泣かせてるのは、アカツキでしょっ……。」

「いいから、顔上げる。」

「……嫌だっ……」

俯いたまま顔を背ける。

「しかも意地っ張りと来たもんだ……大変な彼女だな。」

アカツキはそう言いながら僕に視線を合わせるようにしゃがむと、突如、僕の顔を両手で持ち上げると

唇に、キスをした。

「んっ……！？」

本っっっ当に驚いた。約半年ぶりのキス。

数秒後、アカツキは僕を離れた。

「あっ……。」

言葉がでない。アカツキはさっきとは違い、優しくそんな目で僕を見ていた。

「……俺さ、 그레이に隠し事されるのが嫌で……だから、誤解ならそれでよかった。安心したよ。」

「ほ……本当……？」

「ああ。俺もさ、話聞かずに出て行ったりして、ごめんな。」

そう言いながら、アカツキは僕の頭を撫でた。

「うっん、解ってくれて、嬉しいよ。……それじゃ、帰ろっか？」

「そっだな。」

アカツキは立ち上がり、僕の手を引きながら家まで歩いた。

片付け

「……と、こんなもんだな。」

「結構片付きましたね。」

今、私と紅丞さんは、グレイが使ってる空き部屋にいる。

紅丞さんの家は、確かに大きいのだが、部屋数も多く、紅丞さん本人の部屋と、ご両親の部屋。そして、来客用の部屋と、何故かは知らないが空き部屋が1つだけある。

「……思ったんですけど、この部屋、誰の部屋なんですか？」

「ん？……弟の。」

「え！？紅丞さん、弟がいたんですか！？」

「そうだけど……言ってなかったっけ？」

「聞いてませんよ……初耳です。」

「そっか……だったらごめん。黙ってて……。」

「大丈夫ですけど……何歳年下なんですか？」

「年下って言うか……双子なんだ。」

「そうなんですか？……てことは、同じ高3？」

「そう。向こうは全寮制の高校に通ってるんだ。」

「へえー……意外です。紅丞さんに弟がいたなんて。双子ってことは、顔も似てるんですか？」

「うーん……中学の奴らに結構似てるって言われたけど、今はどうなんだろ……3年間会ってないから解らない。」
その時。

「ただいまー。」

玄関から 그레이 の声が聞こえた。

「帰ってきたみたいだな。」

私と紅丞さんは部屋を出て階段を下りて行った。

「「おお……。」」

部屋についた瞬間、 그레이 と暁文は小さく歓声を上げた。

とりあえず、元々紅丞さんの弟さんの部屋なので、その半分を 그레이 の部屋用に改造（つていうか模様替え）しただけだったのを、全体を模様替えさせていただいた。

「ほとんど未来に助けてもらったんだぜ。」

紅丞さんは笑顔でそう言った。

……紅丞さん本当に体力無いから、テーブルも1人じゃ持てなかったみたいで……情けない。

私？私は……まあ、筆筈は1人で持てた。中身詰まってたけど。

「まさかこんな風にしていただけなんて…ありがとうございます。」

「暁文は丁寧にお辞儀をした。……っていうか、そろそろ本気で気になつて来た。」

「…ねえ、暁文。」

「ん？」

「何で、紅丞さんには敬語なの？暁文よりも年下なのに。」

「あ、それ、俺も気になつてた。」

紅丞さんが続けて答える。

「僕も。」

グレイも後に続く。

「ああー……だつて、未来の目上の人だし、俺もそうするべきかなーと思つて……。今更変えられないし。」

「……だからだそうだ。」

「へ……へえ……。」

「…そりゃあまあ、3人ともこういう反応しかできないわな。」

その後、暁文と 그레이 を部屋に残し、私と紅丞さんは2人でリビングへと向かった。

部屋に入った瞬間、携帯のバイブがなった。

「あつ…誰だろ？」

ディスプレイに表示されたのは、知らない人の電話番号。陸のは先日登録したし……。

出てみた。

「あつ、あのつ、もしもし……？」

…夏子だった。

電話

「もしもし、夏子？どうかした？」

「あつ、よかった…あつてた…。」

「？…どういうこと？」

「あの…電話番号を教えてもらうときに、口頭だったもので、あつてるかどうか不安で、確認がてら電話してみたんです…。」

「あ、そうだったんだ？」

「はい。…あの、お忙しかったらすみません…。」

「いや、かまわないよ、ちょうど暇だった。」

「そうですか？…それじゃあ、あの、1つ訊いてもいいですか？」「いいよ。」

「えつと…安藤さんって、何部なんですか？」

「え？…演劇部だけど、どうかしたの？」

「いえ…なんでもないです、ありがとうございました。そ、それでは、失礼します。」

「あ、うん。また明日ね。」

「はい、また明日。」

そう言つと、夏子は電話を切った。

「未来、誰からだつたんだ？」

紅丞さんが後ろから呼びかける。

「学校の同級生からですよ。」

そう言いながら携帯をポケットにしまう。

「同級生…そう言えば、今日、どうだったんだ？同級生の、その…反応は。あ、いや、言いたくなかったら言わなくてもいいんだけど…。」

「大丈夫でしたよ、みんな優しくかったです。」

不安な表情を浮かべる紅丞さんに、笑顔で答える。

「……そっか、よかったな。」

紅丞さんも笑顔で答えてくれた。

勘違い？

朝。玄関にて。

「それじゃつ、紅丞さん、行きましょうか。」

未来が俺の手を掴んで引つ張ろうとする。

「あ、未来、ちょっと待って……。」

「え、どうかしたんですか？早くしないと遅れちゃいますよ。」

「それが……さっき、聴覚がパワーアップしたみたいで……。」

「じゃあ外に出られないじゃないですか……うーん……。」

何やら悩んでいるようだ。

「未来、俺、別に関後から行っても大丈夫だから。先に行ってもいいし。」

「いや、そうじゃなくて……私、紅丞さんと一緒に学校に行きたいんです。」

「……え？」

何それ、え？てことは……え？これ、”甘えてる”ってことでいいのか？

顔が徐々に熱くなる。

「…紅丞さん、顔真っ赤ですけど、何かよからぬことでも考えてるんですか？」

未来が俺を睨む。

「い、いや、まさかそんなこと……。」

「……とにかく、私、思ったんですけど、ランダムに五感がパワーアップするわけじゃないと思うんです。」

「と、いうと？」

「私はほら、出血で性別が変わりますし、それを最初は”大けがすると性別が変わる”って勘違いしてたんです。」

だから紅丞さんのも、もしかしたら勘違いかも知れませんか？」

確かに、カラスは”紅丞には特殊な力がついた”とか言っただけで、ランダムで五感がパワーアップするとは言っていない。

「……でも、実際、ランダムにパワーアップしてるし……。」

「それも、気付かない所でキツカケがあるのかもしれないよ……」

「ちよつと私、”ある事”を思いついたんで、目、瞑って下さい。」

「え、こう？」

目を瞑る。

「失礼します。」

未来がそう言った直後

唇に、柔らかい何かが触れた。

そして

キィィーン……

酷い耳鳴り。

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

聴覚が元に戻り、俺が目を開けると同時に、未来が俺から離れた。

「あつ……………」

茫然とする俺。

未来は恥ずかしそうに俯き、上目使いで俺に尋ねた。

「…………ど、どうでした？その…聴覚、元に戻りました？」

「え、あ、ああ……………」

ヤバイ、顔が熱い。すごく恥ずかしい。

っていうか、ある事って、キスのことかよ…………びつくりした。

「…………てことは、どうやらキスで元に戻るみたいですわね。」

「そ、そうか？」

「そう言うことにしておきましょう？それじゃ、行きますよ。」

未来は俺の手を引っ張り、家を出た。

手紙 その2

「……あれ？」

クラスに1番乗りし、机に教科書を詰めようとしたら、あるものを見つけた。

それは 手紙。

まさか……あのメイズっていう吸血鬼から？と思ったが、それは違った。

封筒には小さく、”赤崎夏子”と書かれていた。

……夏子が、私に？…直接言えばいいのに…。

封筒を開けると、中から2つ折りにされた紙が出てきた。

その内容を見て、驚愕した。

『突如、このような手紙を送ってしまい申し訳ありません。安藤さんの性別の事と、私の事で、少しお話があります。

今日は運動部も演劇部も休みだと伺いましたので、本日放課後、体育館で待っています。 赤崎夏子』

詳しい内容は割愛するが、大体このような内容の文章が書かれていた。

……
一体何の用だろっ？

暴露

その日は1日授業に集中できなかった。

私の性別と、夏子の事……一体何の関係があるのだろうか？

そしてやってきた、放課後。

私は体育館へとやって来た。

バレー部やバスケット部の練習試合などでよくうちの高校が選ばれるほど、造りがいい体育館。

夏子は、そのバスケットゴールの下に立っていた。手には、どこから持ってきたのか、バスケットボールを持っている。

「……夏子？」

「あつ、安藤さん。」

私に気付いた夏子は、ゆっくりと歩いて近付いてきた。

「いきなりお呼びして申し訳ありません……どうしても今日、お話ししたいことがあったんです。あ、お時間は取らせませんので。」

「いや、帰っても暇だから大丈夫だけど……そんなに大事な話があるの？」

「はい。安藤さんの、性別の事について、色々訊いてもよろしいで

すか？」

「えっ、な、何？」

「……その、アルトから聞いたのですが、安藤さんも、吸血鬼のパートナーをなさっているんですね？」

「あ、うん……そうだけど……」

「それで、あの……安藤さん、人間が成人を迎える前に、吸血鬼の血を飲んだらどうなるか……ご存知ですか？」

「……知ってる。人間じゃない力を手に入れることになる。」

「そうです。……私が何を言いたいか、解りました？」

「うん。……要するに夏子は、私のこの性別が変わる体質は、吸血鬼の血を飲んだことによってついたものだ……って言いたいんだよね？」

私の言葉に、夏子はしつかりと頷いた。

「……そっか……いや、間違っではないよ。確かに私の体質は、小さいころに暁文の血を飲んだ事によってついたものだけど……」

でも、それと夏子がどう関係してるって言うの？」

確か、手紙では”私の性別と夏子の事”と書かれていた。

「そのこと……なんですけど、あの、驚かないで聞いてもらえますか？」

夏子は俯きながらそう言った。

「大丈夫、ちゃんと聞いてるから。」

「あ、ありがとうございます、あの……」
突如、夏子は顔をあげ、こう言った。

「私、実は、幽霊体質なんです。」

ダークシュート

幽霊体質と聞いて、思い浮かべるのは、幽霊が見えたり、幽霊の声が聞こえたりする人。

でも、夏子が言う幽霊体質とは、そう言うことではないらしい。

「私の身体も、ある意味普通じゃなくて……その……安藤さんのように、吸血鬼の血を飲んでしまったせいで、特殊な力が身についてちゃったんです。」

「それが、幽霊体質？」

「はい。……あの、私、あまり自分の体質の事を人に話したことが無いので、上手く説明できないので、ちょっと”実演”してみますね。」

「じ、実演？」

「はい。」

夏子はそう言うと、持っていたバスケットボールをその場で何度かバウンドさせると、バスケットゴールへ向けてドリブルして、ゴールの真下で大きくジャンプし

見事な、ダンクシュートを決めた。

「えっ!?!」

バスケの試合のテレビ中継でも見たことなかったダンクシュートを、まさかこの目で、しかもこんな間近で見られるとは思ってなかった。

夏子はボールを両手でゴールの中に押し込むと、ボールよりも僅かに遅れて床に着地した。

「はぁ……はぁっ……」

少し、息が上がっているようだった。

そのままくると私の方を向き その場に倒れた。

「夏子っ!?!」

慌てて駆け寄る。

「夏子、どうしたの!?!」

まさか、いきなりダンクシュートなんてしたから、体調不良でも起こしてしまったんじゃないだろうか？
ゆっくりと抱きかかえる。

その直後

「あ、私は大丈夫です。」

夏子の声が、”別の方向から”聞こえた。

「…………え？」

恐る恐るその方向を見る。

そこには、”少し半透明”になった夏子が立っていた。

ダンクシュート（後書き）

友人がバスケットボールを持ってるときは必ず「ダンクダンク!!」って叫ぶ私。

幽霊人間

「あ、あの、安藤さん、幽霊とか平気ですか？」

夏子は私を見下ろしながらそう言った。

「…え、あ、いや、幽霊は平気だけど……え？」
あまりの事に頭がついて行かない。

確か、夏子は今、私の目の前でダンクシュートをかまして、そのまま倒れて……で、慌てて駆け寄ったら、夏子が2人いて、しかも片方半透明って……どういう状態！？」

「……これが、幽霊体質です。」

「え？……てことは今、夏子は、幽霊状態ってこと？」

「幽霊っていうか……身体から魂が抜けた状態って言えば、わかりますかね？」

「……あー、なんとなくわかった。今、夏子は身体から魂が抜けた状態で、バスケットをするとその状態になるってこと？」

「いや、そう言うのではなくて……私、”心拍数が上がるとその状態になる”みたいなんです。」

「だから私、運動禁じられてて……ほら、私が体育やってるとこ、見たことないでしょう？」

「た、確かに……っていうか、どうやって元に戻るの？」

「しばらく時間が経つか、心拍数が一定まで下がれば元に戻ります。」

「ふーん……でもさ、なんか、夏子が2人になったみたい。」

「アルトにもそう言われたんですが、魂だけの状態だと、いろいろできないことも多いみたいなんです。」

「出来ないことって？」

「例えば……。」

夏子は私に手を差し伸べた。

「触ってみてください。」

そう言われたのでゆっくりと手を伸ばし、夏子の手に近付ける。

だが、夏子の手には触れることができず、そのまま私の手は空を切った。

「……え？」

「…この状態だと、他の物質に触ることができないみたいなんです。だから、自分の身体を運ぶことができないんです。」

でも、逆に、壁とかをすり抜けることができて便利なんですけどね。」

夏子は照れ笑いを浮かべながらそう言った。

「じゃあ、今、夏子は身体の感覚がない…ってこと？」

「いえ、そう言うことではなくて…何て言ったらいいんでしょうか…その、私の身体の本体が触れているものの感覚は解るんです。魂だけが切り離された状態です。」

「身体の本体…ああー、なるほど。」

「解りました？…それで、他にも、この状態だと、^{魂だけ}周りの音が聞こえないんです。」

「聴覚が機能してないってこと？」

「はい。ですから、周りの音は身体の本体が聞いているのを感じ取っている…ってところですかね。」

「なるほど…って、それじゃあ、目も見えないんじゃないの？」

「あ、それはないんです。ちゃんと目は見えますよ。」

「……あれ？」

その直後、夏子の身体が更に透けて見えた。

”見えた”んじゃない。実際に透けてるんだ。

「あ、そろそろ元に戻りますね。」

そう言い終えるころには、完全に消えてしまった。

「ん……うつ。」

夏子が目を覚ました。

「夏子、大丈夫？」

「あ……平気です、お手数おかけしました……。」

夏子と私はゆっくりと立ち上がった。

「私のことについての話はこれで終わりです。……納得してくれました？」

「うん。話してくれてありがとう。」

「どういたしまして。それでは、失礼します。」

夏子は律儀にお辞儀をすると、歩いて体育館を出て行った。

幽霊体質かあ……… 凄いなあ、夏子…自分からその事を言っちゃうなんて…。

私なんて、みんなに見られてようやく、だからなあ………。

「……… 帰るかな。」

鞆を持ち、体育館を出る。

玄関まで行き、靴を履き替えようとした、その時。

突如、視界が真っ暗になった。そして

「だーれだっ!？」

……… という、元気な声。

「……… 陸？」

「あつたりー。」

視界が戻り、後ろを向くと、腰に手を当てながら満面の笑みを浮かべている陸がいた。

「陸……… あんた、もう少しまともなことやりなさいよ………。」

「わりいわりい。それよりさっ、一緒に帰ろうぜ?」

「ん…別にいいけど。」

そう言いながら靴を履き替える。

「よしっ、んじゃ、行こうぜ。」

陸は既に靴を履き替えているようで、さっさと先に行ってしまった。

誘い

「なんか、懐かしいなー。こうやって一緒に帰るの。」

「そうだねー。陸はいつも買い食いしてた。」

「で、未来はそれを注意はするんだけど、腹減ってるから結局一緒に買っちゃうんだよな。」

「あの時の陸は今よりもすっかりしてた気がする。」

「え、そう?」

「……とまあ、様々な会話を交わしつつ、私と陸は帰路についていた。」

「……ところで、陸。」

「ん?」

「今はどこに住んでるの?」

「あー、それなー……。住んでるところはだいたい未来が住んでるところの近く。…親離れしたんだ。」

「え、てことは、もしかして1人暮らし?」

「そっいうわけじゃないんだけどさ……。」

「何やら歯切れが悪い。」

「……陸?」

瞬間、陸が私の方を向いて立ち止まった。

「あ……あのさっ、未来。今から俺の言うこと、信じてくれるか?」
「えっ?」

な、なんなんだ今日は。夏子といい陸といい……。

「し、信じるけど……何?」

「じ、じゃあ聞いてくれ。……未来さあ」

そして、信じられないことを言った。

「もし、俺が”吸血鬼のパートナーやってる”って言ったら、信じるか？」

暴露 その2

何を言っているのか、よく解らなかった。

陸が 吸血鬼のパートナーに？

……いやいやいや、まだ”もしも”の話だ。まだパートナーをや
つてない可能性がある。

「……ごめん、信じられない。」

「……そっか。じゃ、ついてきてくれ。」

そう言くと、陸は歩きだし、紅丞さんの家の方向とは別の方向へと
向かっていった。

「……………」。

「……………」。

互いに無言。

思えば、陸は先ほど、”吸血鬼のパートナー”と言った。

吸血鬼は、知らない人から見れば、想像上の生き物でしかない。そ
んな生き物のパートナーの有無なんて、解るわけがない。

でも、陸は確かにパートナーと言っていた。

……じゃあ、まさか陸は……。

「……ここだよ。」

そう言つて、陸がたどり着いたのは、とある家の前。

「ここつて……陸の家？」

私の言葉に、陸は小さく頷いた。

「俺、同棲してるんだ。吸血鬼と一緒に。…未来だつてそうしてるつて、その吸血鬼から聞いた。」

「……そっか。」

そういえば、この”そっか”も、陸が昔、連呼してるのが移ったんだっけ…。

陸はゆつくりと扉を開け、私を家に招いた。

同棲

「ただい　　むぐっ!!」

”ただいま”と言い終わる寸前で、俺は突如現れた何者かに押し倒された。

「うわっ!？」

未来が驚いて後退りする。

「陸ーっ、おかえりー。」

「お……おう……。」

何者か　　っていうか……メルにはどうやら未来が目に入っていないようだった。

「　　って、メル!？」

「うん?……あ、未来じゃん。」

ゆっくりと立ち上がる。

「……もしかして、陸の家に住んでる吸血鬼って……メルの事だったの!？」

「ん?……あー、陸が言っちゃったのか。うん、そうだよ。　　よいしょっ。」

メルは俺を物のように引っ張り上げると、

「大体半年前からパートナーやってもらってるんだよっ。」

笑顔で俺を抱きしめながらそう言った。

「は、半年も前……から?」

未来は驚きを隠せないようで、ずっと俺とメルを交互に見てる。

「んんっ……お前、離せてー!!」

メルの腕を払い除け、脱出。

「ふうっ……半年前って言っても、去年の9月らへんからだけだな。」

「え、それ、私もなんだけど。」

「え？そうなのか？」

「なんだ、未来と同じ期間か。なんか運命を感じる。」

「凄い偶然だねー。」

メルは俺たちを見ながらニヤニヤしている。

「……まあ、そういうわけで、俺、吸血鬼のパートナーやってるんだよね…驚いた？」

「うん……でも、ちよっと心配になった。」

「え、なんで？」

「だってさ、陸が吸血鬼のパートナーなんて……こういうのも変だけど、荷が重いような気がして…。」

「ああー……俺も最初はそう思ったよ。でも、やっていくうちに慣れた。…ちよっと強引なんだけどな。」

「私のどこが強引なのよー。」

メルが横で抗議してる。軽く無視。

「……とにかく、その…俺、こういうことしてるわけだけど、それでも、弟扱いしてくれるかな？」

どっちかって言うと、小学校を卒業して、未来がいなくなっ、めちやくちや寂しかった。

「……いや、恋仲がどーのこーのっていうことはないんだけど、いつも一緒だった姉がいないと物凄く寂しいもんだから…。」

「もちろん。私もパートナーやってるし。」

未来は笑顔で答えてくれた。

尋問

「それじゃ、陸。また明日、学校でね。」

「おう、またな。」

私は陸に背を向け、歩き出した。

「ただいまー。」

家に帰ると、 그레이 がリビングから飛び出てきた。

「おかえりー、未来ちゃん。紅丞が心配してたよ。」

「紅丞さんが？……あー…。」

確かに、今日は”用事があるので先に帰っていてください”と言っ
てはいたのだが、ちよつと時間かかりすぎた。もうすぐ夕方だ。

「部屋にいるから、早く行ってあげて。」

「うん、解つた。」

駆け足で階段を上り、部屋に向かう。

ゆーっくりと扉を開ける。

「紅丞さん…？」

扉の隙間から顔を覗かせる。

「……………」

紅丞さんは椅子に腰かけ、ジト目でこちらを見つめていた。

「あ、あの…遅くなつてすみませんでした…。」

「…いいから、入ってこいよ。」

部屋に入り、恐る恐る近付く。

紅丞さんは机の椅子に胡坐をかいて座り、私を見上げた。

「おかえり……でも、ずいぶん遅かったな。」

「す、すみません…友人の家に行ってまして…。」

本当は従兄弟なんだけども。

「ふーん……その友人ってのは」

「浮気なんてしてませんから。」

「何も言っていないんだけど……。」

続けて質問しようとする紅丞さんの肩を掴む。

「あつ…!？」

怯んだ。

「…紅丞さん、私の事が信じられないんですか？」

「い、いやっ、そういうつもりじゃ……。」

顔がみるみる赤くなっていく。そろそろかな。

「私は、紅丞さんだけを愛しています。」

真っ直ぐ目を見て、言ってやった。

「あ……あ、ありがとう…。」

紅丞さんは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

もうひと押し。

「どういたしましてっ。」

礼を言いつつ、抱きしめる。

「未来っ……。」

紅丞さんも私を抱きしめてくれた。よし、完璧。

「……それじゃ、私、夕飯の準備してきますね。」

「あ、ああ…。」

紅丞さんは若干名残惜しそうに私を見送ってくれた。

いやあ、我ながらちょっと悪いことをしてしまったと思う。

でもまあ、紅丞さんはそれくらい単純で軽いってことは伝わったと思う。

「……なんか、すっごい罪悪感が……まあいいや。」
独り言を喋りつつ、キッチンへと向かった。

尋問（後書き）

情けない男を見ると途端に紅丞を思い浮かべるようになってしまいました

現実問題と猫

翌日、学校へ1番乗りした瞬間、先生に呼び出されてしまった。

……まあ、解つてはいた。性別の事だつてのは解っていた。逆に何故2日間も呼び出さなかったのか不思議に思っていた。

「お前は女子生徒なのか？それとも男子生徒なのか？」

率直に、そう聞かれてしまった。

「戸籍上は女性ですが……小さいころから不思議な力があつて……出血が原因で性別が変わることがあるんです。」

……と、吸血鬼や、吸血鬼の血の事は内緒で、”不思議な力がある”ってことで話しを進めてもらった。

ちなみに、その時の性別は

男。

……保健室の先生がやたら俺をジロジロ見ていたのが印象に残ってる。

とりあえず公になることは避けたかったので、学校の外に情報を出す事だけは何とか阻止し、

その他の問題（体育はどうするとか、クラスではどうするとか。）は放課後に決めることとなった。

……上記の事を、昼休み、一緒に昼食をとっていた綾子と夏子に伝えた。

「　　というわけなんだが…どう思う？」

「そうだねえ…未来はどうしたいの？男のままか女のままか。」

「俺は…隠す必要はもうないから、堂々としたいところだけど…。」
それを聞いて、夏子が口を挟んだ。

「でも、まだ知らない生徒もいるんですよね？…だったら女のままがいいと私は思いますよ？」

「…そうだな、じゃあ明日からはもう女子生徒のまま固定で行くよ。」
すると

「「ええー??」」

と、複数の女子の不満の声。

後ろを向くと何やら不満そうな表情を覗かせた女子たちがこちらを見ていた。

「安藤さんは男の方がいいよー。」

と1人の女子が言ったのを筆頭に、次々にそう言った声上がる。

「……未来、どうする？」

綾子が目を細めてこちらを見る。

「…女子生徒のまま固定で。」

その後、先ほどのを超える女子の不満の声が出たことは言うまでもない。……なんで男がいいと思ったんだこいつら。

「あー…疲れたっ…。」

人^{ひと}気のない廊下で背伸びをする。

…結局あの後、職員室で一通りこれからの事について話し合つのに2時間もかけてしまった。　疲れた。

「　あつ、安藤さん。」

廊下の角を曲がった先に、夏子がいた。

「夏子、こんなところで何してんだ？」

「安藤さんを待ってたんです。」

「俺を？…何で？」

「なんとなくです。別にいいでしょう？」

「ん……まあいいけど。」

「それでは、行きましょうか。」

夏子は俺の前を歩きだした。

……ちょっと、引つかかる。

昨日、夏子は俺に、自分の幽霊体質を明かしてくれた。そして今も、俺の事を待っていた。

アルトの話によれば、夏子は”人見知りで人間不信：簡単に言うると、たいして命を狙われてもいないのに、無駄に自分を防衛したがるタイプ”だったはずだ。

それなのに……会ってすぐの俺にここまで関わってくるのは何故だ？
……まあ、確かに吸血鬼の血を飲んだことがあるやつなんてほとんどいないし、同じ境遇の人間は珍しいのかもしれないけど……なーんか引つかかる。

「ところで、安藤さん。」

「ん？」

「安藤さんってどこに住んでるんですか？」

「どこって……少し前に家、来なかったっけ？」

「いえ、日比野さんから、もう1つ家があるとお伺いしまして……。」

「あー……それな、ここから地下鉄で4駅離れた所にあるんだ。」

「4駅って、結構遠いですね。」

「ああ。だから今、紅丞先輩の家に居候してんだけど、結構楽なんだよな。早起きして急ぐ必要もないし。」

……夏子はどこに住んでるんだ？」

「家から学校が見えるところに住んでるんです。」

「へえー、ってことは、紅丞先輩の家よりも近いわけだ……。」

「そうなりますね。……良かったら、家、来ませんか？」

「え?... あ、ごめん、今日はちょっと用事があるから無理。」
用事って言うか、早く帰らないと今度こそ紅丞さんが拗ねてしまうかもしれない。

廊下で、上記のような会話をして、靴を履き替え、学校を出た。

「あつ。」

門を出た瞬間、夏子が声をあげた。

「夏子、どうかしたのか？」

「安藤さん、あれ。」

夏子が前方を指さす。

そこにいたのは

猫。それも、真っ黒な黒猫だった。

「?... ただの野良猫じゃないのか? この辺じゃ珍しいけど。」

「それがですね... あの猫、”猫に見るんですけど、猫じゃない”んです。」

「え? どういうことだ?」

夏子はその場にしゃがむと、両手をパンパンと叩いて猫を呼んだ。
猫はゆっくりと夏子に歩み寄る。

夏子はそれを抱きかかえながらこう言った。

「実はこれ、アルトなんです。」

「……………はい？」

いや、どう見たって猫だし…………。

「安藤さん、吸血鬼には、それぞれ特殊な力を持っている吸血鬼と、特殊な力を持っていない吸血鬼がいるって、聞いたことありませんか？」

「あ、なんか聞いたことある…………。」

以前、”特殊な力を持つ者もいれば、血を吸うことしか能がないものもいる。”って聞いたことがある。

……………てつきり魔力の事かと思ってたけど……………違うらしい。

「そうなんですか？じゃあ話が早いですね。……………アルトの場合、想像実現”がそれに当たるんです。」

「”想像実現”？」

「えっと……………アルトの場合、契約した対象、つまり私にだけ使うことができるんですが、”私が想像した物質に変化することができる”んです。」

「夏子が想像した物質……………てことは、そのアルトは、夏子が想像したからその姿になってるって事か？」

「はい。……………っていうか、安藤さん。」

「何？」

「信じてくれるんですか？その……………私の話を。」

「うん。夏子が嘘つくわけ無いと思ってるから。」

そう言った瞬間、夏子はかなり驚いた表情を見せた。

「えっ、あ、あの、それじゃ、私、この辺で失礼します…………。」

そして、恥ずかしそうに俯くと、足早に去って行ってしまった。
。

現実問題と猫（後書き）

”猫”とパソコンで打った瞬間に（〃＾・＾〃）とか〃＾
か出てきたんですが、これって何かの罨ですか。可愛いっ
― 〃と

企み

驚いた。

それはアルトも同じなようだった。

アルトは安藤さんに「赤崎夏子は人間不信だ。」と言うことを伝える。
である。

……「てことは、人間不信」^{イコール}周りの人間を信じることができない。

「知り合っイコールてすぐの人間にそう易々と自分のことや身の回りの事を教えない、もしくは嘘をつく。」

……「と言うような方程式は安藤さんの中にも出来上がってると思っイコールていた。」

それなのに

「不思議だよね、アルト……。」

腕に抱いた黒猫に話しかける。

「……そうだな。」

猫の姿のまま、アルトは答えた。

「本来なら、想像実現の話をした時に、」証拠を見せる」くらい言っイコールてもいいはずなのにな。」

アルトは呆れたように答えた。

……「そう、」証拠を見せる」。私はもしかしたらその言葉を待っていたのかもしれない。

でも安藤さんは……あの人は疑うどころか、」夏子が嘘つくわけ無いと思ってる」と言った。断言した。

これなら 成功するかもしれない。

「何企んでるんだ？」

「……え？」

アルトの質問に、思わず変な声がでた。

「な……何のこと？」

「とぼけんな。俺が何も察してないとも思っただのか？」

アルトが私を見上げる ルビーのような綺麗な目が、私を見ている。

「……………」

私はまだ、人間不信から抜け出せていない。安藤さんも、日比野さんも、まだ信じる事ができない。

信じられるのは アルトだけ。アルトは、人間じゃないから。

「夏子、何を企んでいるのか、正直に話せ。」

ルビー色の瞳に写る私の顔は、暗い表情を浮かべている。

「…………復讐する。安藤さんを利用して、あの男に復讐する。」

これは咄嗟に決めたことではない。
私が幽霊体質を明かした時から、この計画は始まっている。

馴れ初め

その町は、異常だった。

日本とは思えないほど治安が悪く、略奪、強盗、暴力沙汰………犯罪が日常的に起きていた。知らない人が見れば、無法地帯とでも呼んでいたかもしれない。

私はその町で生まれ育った。

小学校の頃は平凡に過ごすことができた。

でも、中学に進学した途端に、歯車が狂い始めた。

その学校では、妙な派閥争いが激しく、どの派閥にも属さない者は、周りからイジメにあう。というのがまるで伝統のように続いていた。

そして、私はどこも属す事が、出来なかった。

……何が起るのか、勘が悪い人でも解ると思う。

夏の暑い時期。

「赤崎、コンビニ行って万引きしてこい。」

また”あいつ”だ。またそうやって私に犯罪を強要させる。

嫌な顔をすればナイフをちらつかせ、「怪我はしたくないだろう？」と脅される。

だから、逃げた。

”嫌だ”と吐き捨て、”あいつ”の前から逃げた。

誰もいないシャッター商店街をひたすら走る。後ろからは、”あいつ”と、そのトリマキが4、5人追いかけてくる。

路地裏に駆け込み、捨てられている家具を足場に、屋根が低い建物の上に逃げる。

「くそっ！あの女、どこ行っただよー！！」

「おい、もういいだろ、明日学校でやりやあいいじゃん！」

下から”あいつ”とそのトリマキ達の声が聞こえる。

そっと屋根の上から覗いてみる。　幸い、まだ気付かれてはいない。

……とりあえず、ほとぼりが冷めるまでここにいるしかないなあ。
住民には申し訳ないけど。

よいしょっ、と、その場に腰を下ろす。その直後

「なんだあ？お前。」

「俺たち今ちよつとイライラしてんだよねー。一発殴らせてくんねえ？」

トリマキ達の声。何事かと下を覗く。

そこには、1人の男を取り囲んでいる”あいつ”とそのトリマキ達の姿があった。

男の服装は、この蒸し暑い時期にまさかの真つ黒なコート。しかもご丁寧にフードまでかぶってて、顔は見えない。

なぜ男だと解ったのかというと、トリマキ達が男を取り囲みながら「ってか、暑くないの？おにーさん。」と男を挑発していたからだ。

そうこうしている間に、男が、先ほど私が逃げ込んだ路地裏に連れて行かれてしまった。

見つかったらヤバイ、とりあえず身を隠す。

数秒後、数回の誰かを殴る音と、物の壊れる音が聞こえ、路地裏から”あいつ”とトリマキ達が逃げていくのが解った。

だが、男の姿が見えない。

ゆっくりと屋根から身を乗り出し、路地裏を確認する。

男は、路地裏の隅の方で

倒れていた。

「よいしょっ……。」

雨樋を伝い、路地裏に降りる。
恐る恐る男に近付く。

「……だ、大丈夫……ですか？」

小さな声で問う。

「んっ……。」

気がついたようだ。

地面に手を突き、ゆっくりと身を起こす。そして

「なんだ？お前……。」

男の目が、私を捕らえた。

その目は、正確には瞳は、人間の黒ではなく

鮮やかなルビー色をしていた。

「!？」

驚いた。人間ではないと、直感した。

「あ、あなた、一体」

何者？と言っ前に、私の興味は別方向へと向いてしまった。

男の、唇。 血が滲んでいる。さっき、殴られたのだろうか。

「痛え……。」

男は私から視線を外すと、手の甲で血を拭おうとした。 のを無意識のうちに手を掴んで止めてしまった。男が驚いて私を見る。

男の口から覗く、赤い、綺麗な血 ” 飲みたい ” という衝動が湧いてくる。

手を掴んだまま、もう片方の手で肩を掴み、固定する。

そして、出血している唇に、吸い付いた。

甘い。人間の血とは思えない。

「っ!!」

瞬間、男が私を突き飛ばした。

「きゃあっ!!」

悲鳴を上げながら、私は後ろに倒れた。

……痛い……腰打った……

ゆっくりと顔を上げ、男を見る。

男は、顔を真っ赤にしながら口を押さえていた。

「お、お前っ、今……。」

何やらあわあわしている。「……私、何かしました?」

「いやっ!自分のしたこと思い出して見るよ!」

男は、顔を更に真っ赤にして声を荒げた。

私のしたこと?

……確か、唇から血が滲んでるのを見て、それで………あ。

直後、自分の顔が赤くなるのが解った。

……どうやら目の前の相手がファーストキスの相手らしいです。

「ごっつ、ごめんなさい！！」頭を下げる。

「謝って済むかあつ！！これだから人間は嫌いなんだよつ！！！」
人間がどうか言ってる。こりゃヤバい。変なことに巻き込まれる前に、早々に切り上げなければならぬ。

「あ、あのつ……わ、私、そろそろ失礼します……。」「
怒り心頭な男に背を向け、歩き出そうとした。

が、男に腕を捕まれ、止められた。

「なつ……なん、ですか……？」

声が震える。心拍数が急速に上がる。

「お前、大丈夫か？」

「……え？」

振り向く。

「大丈夫って……どういう事ですか？」

「いや、だから……あ、そうか。お前、俺のこと知らないんだな……」

「」

「？……いったい何のことですか？」

「うーん……どっから説明すっかなあ……。」「

何やら悩んでいるようだ。

「あ、あの……帰っても、いいですか？」

「ん、駄目。」「

「えっ……。」

「悪いけど、お前をそのまま帰すわけには行かない。俺の血を飲んじまったからな。」

「あ、あなたの、血？」

「そう。……だから、少し調べさせてもらっぞ。」

そう言つと、立ち上がり、両肩を掴んできた。顎に手を添えられ、くいつと上を向けられる。

「えっ……？」

男と目が合う。その顔は、とても顔立ちがよく、ルビー色の瞳は、心を見透かされそうなくらい綺麗だった。

「あ、あのっ……。」

振り解こうとするが、肩をがっちりと掴まれ、身動きがとれない。

「……じつとしてろ。」

低音の、恐ろしい声が耳に届く。

怖い。今すぐ逃げたい。

「い……嫌あつー！」

先ほどされたように、男を突き飛ばし、走り出した。

「っ……おいー！」

後ろから男の声が聞こえるが、構わず路地裏を抜ける。

”あいつ”から逃げ切ったかと思えば、今度は見知らぬ男とキス……今日はついてない……。と思った、その瞬間。

「あっ……！？」

身体力が抜け、その場に転んだ。

「痛つ……。」

立ち上がり、膝の砂を払おうとして、気付いた。

身体が、透けている。

「……………え？」

試しに、顔の前に手をかざす。

向こう側が見えた。

「ど、どうなって。」

その時。

「あーあ……………だから言ったのに……。」

さっきの男の声。恐る恐る振り向く。

そこには、呆れたような表情を浮かべている男がいた。そして、その足下には

”私”が倒れていた。

馴れ初め その2

「え……？」

今、私の前に、私が倒れている。

そして、そんな私を、コートを着た男は、呆れたような表情で見ている。

「はぁ……だから言ったのに……めんどくせえ……。」

「い……今、私、どうなって……。」

声が震える。

「そうだなあ……簡単に言えば、”身体から魂が抜けた状態”ってとこだな。」

「た、魂!？」

「そうだよ……まったく、大声出すなよ。その姿、他の奴らに見られたくないだろ？」

「そ、そうだけど……。」

敬語を忘れるほど、今の私は動揺しきっていた。

「……で？どこから話す？」俺が何者なのか”か、”今自分に何が起きているのか”か。」

「こ……後者で。」

「よし……じゃあ、ちよつと失礼。」

そう言つと、彼はうつぶせに倒れている私の身体に右手を近付け、首筋に触れた。

「っ!？」

瞬間、首筋に、”何か”が触れたような感覚がした。

首筋を触って確かめてみるが、何もない。

「えっ……………!？」

驚いて、彼を見る。

「今、何か感じるか？」

「く、首に何か当たってるような……………」

「ふーん……………なるほど。」

安心しろ。それは俺の”手”だ。」

「えっ?……………でも、あなたは今……………え?」

「”魂は切り離されていても、感覚は残ってる”って事だ。解るか?」

「え、えーっと……………何となく解る……………」

って言うか、声が聞こえてくる方向も、前方からではなく後方から聞こえるから、多分触覚と聴覚は向こうから来ているんだと思う。

「なるほどな……………よいしょっ。」

彼は突如、私を仰向けにすると、お姫様抱っこした。

「きゃっ!？」

思わず声がでた。

「そんな声出さなくてもいいだろ……………こんな所に寝てると不自然だ。行くぞ。」

彼は私に背を向けて歩き出した。私も後に続く。

……………魂だけのはずが、かなり感覚がリアルに伝わってくる所為で変な感じがする。

「……………ところでお前、名前は?」

「え?あ……………赤崎夏子。」

「夏子か。俺はアルト。」

「アルト……………って、日本人じゃないの?」

「まあ、そこら辺はあとで説明してやる。……………これから、長い付き合いになるかもしれないからな。」

「えっ……?」
どういうこと?と聞き返す前に、アルトがこちらを向いた。
「……ところで、お前ん家ってどこ?」
「えっと………って、そんなこと聞いてどうするの?」
「決まってるんだろ、家まで送るんだよ、お前の身体。………なんなら、その辺の公園にでも置いておくか?」
「えっ!? あ、いや………じゃあ、家までお願い……案内するから。」
「じゃあ頼むわ。………親、いないよな?」
「うん。」

「ここだよ。」
到着したのは、新しくも古くもないアパートの一室の前。
「……小さくね?」
初めて来て最初の一言がそれか……。
「両親と私、三人暮らしなのよ………仕方ないじゃない。」
そう言いながら扉を開けようとドアノブに手を伸ばした
ノブには触れなかった。
が、
「え?………あれっ……?」

何度手を伸ばしても、空を切るばかりで、触れるどころか、感覚すらない。

「はぁ……やっぱりな。」

呟きながら、私の身体を床におろした。

「……鍵は？持ってたんだろ？」

「あ……えっと、左のポケットに……。」

おもむろにポケットを探るアルト。家の鍵を取り出し、立ち上がった。

「魂が抜けた状態だと、他の物質には触れないみたいだな。」

そう言いながら扉を開け、再び私の身体を抱きかかえると、そのまま家の中に足を踏み入れた。

「自分の部屋とかあるのか？」

「こつち。」

部屋の前に立ち、扉を開けようとするが、やはり触れない。

「だったら……えいつ。」

思い切って扉に体当たり。案の定すり抜けることができた。

「お前……もう慣れたのか。」

そう言いながら、アルトが部屋に入ってきた。

「半透明で、他の物質には触れない……なんか、アニメに出てくる幽霊みたい。」

入ってくるアルトを見つめながらふと思ったことを言ってみた。

「幽霊か……じゃあお前はさしずめ、”幽霊人間”ってとこだな。」

アルトが私の身体をベッドに寝かせながらそう言った。

「ゆ、幽霊人間って……。」

「間違ってはいないだろ？」

「……まあいいや。ところで、あなたって、何者なの？」

私の質問に、アルトはこう返した。

「俺か？俺は……ただの吸血鬼だ。」

計画

もう、あの日だけで何回”え？”と言ったのか、解らない。それほど、あの日という日は驚くべき事が多かった。

アルトは、吸血鬼。

そして私は、幽霊人間。

人外同士だからこそ、息があつた。

互いの悩みを、打ち明けることができた。

これ以上アルトとの馴れ初めを語る必要は無い。続きはまた今度にする。

”復讐”。その言葉を聞いた瞬間、確かにアルトは反応した。でも、それ以上は何も言わなかった。

許可と受け取る。月曜日にでも実行する。

私を散々イジメ、挙げ句、高校にまでついてきた、1歳年下の”あ

いつ”に、復讐する。

誘い その2

月曜日、夏子の様子が変わった。

話しかけても上の空。返事も何も無く、ただぼーっと天井と壁の境目あたりを眺めていた。

「夏子っ！ー！」

思い切って肩の上に手を乗せながら呼んだ。

「わぁっ！？……あ、安藤さん、どうかしましたか？」

「夏子……それ、こっちの台詞。もう下校の時間だよ。」

「え？……早いですねえ、さっきまでお昼休みだったのに。」

「なんか、夏子、今日変だよ？具合でも悪いの？」

「いえ、何でも……あ、そうだ。安藤さん、今日は部活、ありますか？」

「無いよ。部活が有るのは明日から。」

「それならよかった……今日、ちょっとお願いがありまして……。」

「え、また？……いいけど。」

「ありがとうございます。それでは、体育館倉庫に来ていただけますか？」

「そ、倉庫？」

「はい。それでは、失礼します。」

夏子は立ち上がり、礼をすると、足早に教室を出て行ってしまった。

疑惑

私たちが通う高校は、体育館倉庫が外にある。
中は意外と広く、椅子もいくつかある。
靴を履き替え、倉庫へ向かう。
すると

「未来っ!!」

道中にある茂みから、聞き慣れた声が聞こえた。

「えっ……?」

その方向を見る。

直後、茂みがガサガサと動き、中から一匹の黒猫が現れた。
黒猫の目が赤い アルトだ。

「アルト!?……こんなところで何してんの……!？」

アルトはゆっくりと私に近付いた。

「何って……別に何でもいいだろ。」

私はとりあえずアルトに近寄るため、しゃがむ。

「吸血鬼が学校来ちゃだめでしょ……っていうか、暁文に声似すぎ。」

「そこは気にすんな。……夏子は？」

「そこ。」

10メートル先にある倉庫を指さす。

「今、ちようど呼び出されたの。」

「ふーん……。」

アルトは私の鞆を見つめると、突如、半開きになっている私の鞆の中に潜り込んだ。

「わっ!?!……ちよっ、アルト!?!」

「悪いっ、少しの間だけでいいから、中に入れてくれ。」

「えっ……荒らさないならいいけど……。」

「ありがと。……あ、このこと、夏子には絶対内緒で。」

「なんで？」

「なんでって……何となく。…とにかく、頼んだぞ。」

アルトは右の前足で器用にチャックを閉めた。

「ったく……仕方ない……。」

立ち上がり、夏子が待っている倉庫へと向かった。

倉庫の扉を開けると、倉庫内に夏子が倒れていた。

「な、夏子!？」

慌てて駆け寄り、抱きかかえる。

「安藤さん。」

直後、後ろから夏子の声が聞こえた。

「夏子……また、魂抜けちゃったの?」

振り向きながら答える。

「ええ、まあ……お恥ずかしい限りで……。」

夏子は恥ずかしそうに頭を掻いている。

試しに、首辺りに指を当ててみた。

……確かに、脈が速い。心拍数が上がると魂が抜ける、というのは本当のようだ。

「あ、あの、安藤さん。そうされるとくすぐったいんですけど……。」

「」

「あつ、ごめん。」

「いえ、大丈夫です。それで、お願いなんですけど……今から30分ほど、私の身体を預かってもらえませんか？」

「え？……どこか行くの？」

「はい。」

「でも、誰かに見つかりでもしたら……。」

「平気です。今は下校時間なので、生徒は少ないですし、何かあったら壁をすり抜けて逃げれば大丈夫です。それでは、失礼します。」

夏子は軽く礼をすると、走って倉庫の入り口をすり抜けて行ってしまった。

「んじゃあ、とりあえず……。」

夏子を抱きかかえ、近くのソファに寝かせる。

そのままアルトの入った鞆を少し半開きにし、倉庫の隅に置いた。

魂が抜けた時の夏子は、一見すると眠ってるようにしか見えない。

浅くはあるが呼吸はしているし、心臓も動いている。

不思議だなー、幽霊状態って……。

ふと、横目でアルトの入った鞆を見てみた。

アルトは半開きになった鞆から顔だけを出して夏子を見ていた。

無駄に可愛い。

どうしたの？と声を出しそうになったが、それだと夏子にアルトがここにいることがバレてしまう。

とりあえず手招きする。が、首を左右に振られ、拒否された。

刻々と時間だけが過ぎていく。

夏子は、一体何をしにどこへ行ったのだろうか？

そろそろ約束の30分が経とうとしている。

思えば、何故夏子は私に身体を預けたりしたのだろうか？

人間不信なら知り合ってすぐの私に自分の身体を預けたりするだろうか？

もしかして、利用されてる？

……いや、まさか。

あんな性格のいい夏子が、人を利用するわけ無い。

「……夏子、そろそろ30分経つよ。」

呼びかけるが、返事はない。でも聞こえてはいるだろう。
すると、

ガサッ

アルトが鞆から飛び出してきた。
そして

「夏子！いい加減にしろ！！」

突如、怒鳴り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9628z/>

性别人間と幽霊人間

2012年1月8日18時46分発行